
番外版 ミニチュア☆が～でん ～妖刀 斬鬼丸編～

戌神 幻十郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外版 ミニチュア☆がくでん 妖刀 斬鬼丸編

【Nコード】

N09650

【作者名】

戌神 幻十郎

【あらすじ】

友人が書いてくれた、番外編です。

正直・・・自分のより良い仕上がりなので・・・嫉妬。（マテ更新はランダムですの、気長に読んで頂ければ幸いです。

第一話：蟬時雨

※注意！挿絵が有ります（前書き）

本編とは関係ありませんのでご了承を。
ただし、キャラは使用しています。

第一話：蟬時雨

※注意！挿絵が有ります

「ねえ、白夜。ちょっと寄りたい所があるんだけど、いい？」

夕食の買い物帰り。

家からそう遠くない場所に差し掛かったとき、夕紀は白夜に尋ねた。

「構わないが・・・何処へ行くのだ？」

「ふふりん、ひ・み・っ♪」

夕紀はそう言うと、家とは違う方向に進む、道脇の石段を駆け上りだした。

「ほら、白夜も早く！」

「やれやれ」と、白夜はため息をつくとき、夕紀の後に続いた。

——辺りは日が暮れようとしているのに、蟬がうるさいほど鳴いていた。

石段を登りきると、舗装されていない砂利道が、雑木林の中を突っ切るように、一直線に伸びていて、その道をしばらく進んだ先に、古びた鳥居が見えてきた。

「ほお、こんな所に神社があったのか。」

「うん。御参り、して行こうと思って。」

時間も時間だからか、夕紀たち以外、参拝者は居ないようだ。夕紀は拝殿の前に進み入ると、財布からお賽銭を取り出して投げ入れ、鈴を鳴らして、ぱんぱん、と手を合わせて目を閉じ、何やらぶつぶつと呟いていた。白夜は、夕紀の背後で黙ってそれを見ていた。

「白夜は、神様って信じる？」

目を瞑ったまま、夕紀が白夜に問いかける。

「ワシは・・・信じないな。」

「そう？私は信じるなあ。」

「どうして、そんな事が言えるのだ？」

「だって、白夜のような、可愛くって、強くって、優しい子に出会

えたんだもん。これって、きっと神様のお陰じゃない？」

「何を言っておるのだ・・・」

と、白夜は少し頬を赤らめて目を逸らすと、被っている麦藁帽子のつばで自分の顔を隠した。

「ところで、何をお願いしたのだ？」

「えへへ・・・白夜とずっと一緒に居られますように・・・って。」

無拓な笑顔で、白夜のほうを振り返る夕紀。しかし白夜は、その言葉に表情を曇らせ、そのまま黙って俯いてしまった。

「・・・夕紀。」

「なに、どうしたの白夜？」

何時になく深刻そうな顔をする白夜に、夕紀は不思議に思っ
て聞き返した。

「前々から、言おうと思っていたのだが・・・」

——と、その時。

夕紀と白夜の背後で、何かが地面に落下する音がした。振り返ると、見知らぬ一人の少女が立っていて・・・その足元には、水桶がひっくり返っており、地面は水で濡れていた。歳は夕紀と同じくらいだろうか、少女は白衣に朱色の袴姿・・・いわゆる巫女装束に身を包み、肩ほどもである、整った艶のある黒髪は何処か清潔感を漂わせている。

だが、どこか様子が変だ。少女は、何か見てはいけない様な物を見てしまった、といった様子で、その身を震わせながらこちらを見ていた。

「あ・・・あ・・・！！」

「あの・・・何か？」

夕紀は尋ねるが、少女にはその声が全く届いていないようだった。だが、次の瞬間。

怖れの表情は一変し、少女は、内に秘めた敵意を剥き出しにした。
「人ならざるモノ・・・！覚悟ッ！！」

少女は袖の中から護符の束を取り出した。その表情はさながら、獲物を目の前にした狩人を思わせた。

「えっ、えっ？ 一体何なの？」

「下がっている、夕紀！」

白夜が夕紀を庇うように、少女の前に立ちはだかった。

少女が、護符の束を真上に放り投げる。少女の頭上数メートルの地点で、束は弾けて、無数の護符が空中に拡散した。

「符術・・・戦扇！」

少女の掛け声に呼応し、空中に無作為に放り投げられた護符達は、それぞれが意志を持った生き物のように空中を泳いで、少女が天にかざした手に、幾重もの輪を描いて整列した。

「な、なにあれ・・・！」

「戦符、輪廻！」

少女が叫ぶと、護符たちは徐々に速度を上げながら、円形の軌道を描いて旋回し出した。

「まずい、逃げろ夕紀！」

「あ、あわわ・・・！」

危険を察知した白夜は、その場から離れるように促すが、当の夕紀はというと・・・白夜の後ろで慌てふためいていた。

と、その時。

「やめなさい、立花^{リツカ}！」

突然、遠くから男の声がしたかと思うと、少女の顔から、敵意の表情がみるみるうちに消えていった。

「お兄様・・・！」

少女の集中力が途切れたことで、空中を旋回していた護符たちは、制御を失って、ひらひらと中を舞い・・・・・・やがて重力に引かれて、石畳の上に落ちた。

「今の君が戦って、敵う相手ではありません。」

声の主が、本殿のほうから歩み寄って来る。この神社の神主であろうか、若い袴姿の男が、立花と呼ばれた少女の傍に近付くと、夕紀と白夜の前で、深々と一礼した。純朴そうな雰囲気を持った、よく見るとなかなかの好青年だった。>i14370—1515<

「誠に申し訳ございませんでした、妹の無礼をお許しください。」

「お主は・・・？」

「私はこの神社の宮司、『龍禪寺 帝』^{ミカド}と申します。そして、こちらが、私の義理の妹の『立花』・・・・・・ほら、立花、挨拶なさい。」

「で、でも・・・・・・」

「立花。」

「はい・・・・・・」

青年に制され、立花と呼ばれた少女は、渋々、護符の束を袖の中に収めると、夕紀と白夜に向かって無言でぺこりと一礼した。

「ところで、お主らは、ワシの正体に気付いているようだが・・・？」

白夜は警戒を維持しつつも、帝と名乗った青年に尋ねる。

「代々、神職の家系である私達・・・龍禪寺家の人間は、幼少の頃から『人ならざるモノ』を察知するための、修練を受けているのです。先ほど、立花が見せた、『符術』も、その一つです。」

「そうだ！あなた、どうして私の白夜に襲いかかろうとしたんですか！」

呆然と立ち尽くしていた夕紀が、突如、我に返って立花に詰め寄った。

帝と名乗った男は、再び深々と一礼した。

「本当に、申し訳ありません・・・・。彼女の両親は『人ならざるモノ』の手によって、亡くなっているのです。以来、『人ならざるモノ』を目の仇にするようになってしまいました・・・・・・」

「え・・・・！」

「なんと・・・・！」

二人は言葉を失い、お互いに顔を見合わせた。

「その後、龍禅寺家に引き取られ、私の妹として育てられました。彼女には、『人ならざるモノ』も悪さを働くものばかりではないと、私の方から教えていたのですが……。」

白夜には、それが判る気がした。世の中で起こっている争いごとの大体が、そんな理由だ。

「あの、驚かせてしまった、お礼と言ってはなんですが……私がご案内しますので、神社の中を見学して行かれませんか？ 普段は参拝者に公開していない、本殿の中なども、特別にお見せしますよ。」

帝の提案に、白夜は小声で「どうする？」と、判断を仰いだ。

「うーん……折角だし、お世話になろうよ。」

「！……お主、先ほど、あやつに襲われかけたのを、忘れたのか！？」

白夜の言葉に、立花はむっとした。

「いーじゃん、いーじゃん！ 私、本殿の中って、一回覗いてみたかったんだよね！ あ、私、夕紀っていいいます。こっちは、白夜。」

「よろしく願います、夕紀さん、白夜さん。」

青年は二人に向かって、にこやか微笑んだ。だが白夜は、

「全くお主は……単純というか馬鹿というか……。」

と、夕紀の能天気ぶりに、ただため息をつくだけだった。

「では、ご案内しますので、こちらへ。」

——その時、青年の口元が、にやりと笑ったのに、夕紀たちは気付かなかった。

帝が本殿の方へと二人を促す。浮き足立つ夕紀に、白夜は、やれやれといった様子で後続き、そのさらに後ろから、立花が続いた。歩きながら、夕紀が立花に尋ねる。

「さっきの立花さんの、あの技……『符術』でしたっけ。あれ、

すごいね！私も使えたりしません？」

「それは・・・・・・」

言葉を詰まらせる立花の代わりに、帝が答えた。

「ははは、それは無理ですよ。『符術』は、神職の家系を受け継ぐ者の中でも、ごく一部の者にしか、扱う事はできません。私にだって、扱えないんですから。」

「そっかぁ、残念。」

「お主は・・・・そんなものを覚えたところで、一体、何に使うつもりなのだ？」

「うーん・・・・・・」

夕紀は少し考え込むと、

「宴会、とか？」

「・・・・・・」

閑古鳥が鳴いて、一同は沈黙した。

帝に連れられ、本殿へと案内される。帝の話によれば、この神社はその昔、鬼退治をして各地を巡礼していた、『龍禅法師』によって建立された神社らしく、夕紀は帝から、彼の話を興味深そうに聞きつつ、物珍しそうに周りをきよろきよろと見物しながら、感嘆の声を洩らしていた。一方の白夜はと言うと・・・・・・「鬼退治の伝承など、どこにでもある話だろう？」と退屈そうに、夕紀の後に付いて行った。

一通り、本殿を案内してもらった後、

「そうだ、白夜さん、夕紀さん。君たち二人に、是非見てもらいたいものがあるんです。」

「？ 何ですか？」

「先ほどお話した、龍禅法師が、九十九の鬼を退治した刀が、この神社に残っているのですよ。どうです、見たいですか？」

「見たい！ね、いいでしょ？白夜。」

そう言って目を輝かせる夕紀に、白夜は諦めモードで応えた。
「ダメだと言っても、どうせ聞かぬだろう？」

本殿を出て、白夜と夕紀は境内の離れにある、小さな古屋の前に案内された。一見すると廃屋のようにも見える、木造平屋建ての大きな古屋だった。普段は使われていない建物らしく、軒下には蜘蛛の巣が至るところに張っていて、雨戸も全て締め切られていた。

「・・・どうぞ。」

立花が鍵を開けて、白夜と夕紀を、古屋の中へと促す。

「すみません、電気が通っていないものでして。暗いから、足元に注意してください。」

帝が、ろうそくの灯火を片手に、古屋の中に入り、その後二人も続いた。

「え？ここって・・・」

夕紀と白夜は、古屋の中に入った瞬間、妙な違和感に足を止めた。
——今は夏で、しかも古屋の中は締め切られている。電気の通っていないこの古屋の中には、冷房設備などある筈がないのだが、何故か古屋の中は、ひんやりと冷たい空気が漂っていた。

それに、先ほどから感じる妙な圧迫感・・・

「夕紀、外に出ている。」

「えっ？」

——ここに居ては危険だ。

白夜は、本能でそう感じ取ったのだ。

「そう・・・気をつけた方がいいですよ。特に、敵陣の中ではね。」
帝がそう呟くと、突然、立花が夕紀の手を背後から強く引っ張り、夕紀を古屋の中から引きずり出した。更に立花は、素早く戸を閉めると、鍵を掛け直した。

「！・・・夕紀！？」

「白夜！！」

異変に気付いた白夜が、閉められた戸口の方を振り返る。

突然、隔離されてしまった白夜に、夕紀は古屋の外から必死に呼びかけた。

それに構わず、帝は照明のない室内のあちこちに据え付けられたロウソク立てに、淡々と手に持ったロウソクの火を移していく。やがて帝が、全てのロウソク立てに火を移し終える頃には、ほのかな炎の光が、室内を照らしていた。

古屋の中は極めて単純な構造だった。外壁以外の壁や仕切りといったものが一切無く、板張りの、広々とした空間が、古屋の奥の方まで続いていた。

「おい、帝とやら！鍵を開けるように言え！」

「それは、出来ません。これから、楽しい宴が始まるのですから。私と、君の、ね。」

帝が、ゆっくりと振り返る。暗闇の中に、ロウソクの灯に照らされた青年の顔が、にやりと不気味な笑みを浮かべた。

「フフフ・・・まさか、こんなに簡単に罠に掛かってくれるとは思いませんでしたよ。」

「貴様・・・！何の真似だ！！」

白夜が鋭い目つきで、帝を睨みつける。だが、今は彼の相手をする事よりも、夕紀の身の安全を確保することが先決だ。古屋の外に残された立花が、夕紀に何をするか判らない。

「こんな戸など！」

白夜は、入ってきた戸を蹴破ろうとしたが、ある事に気が付いて、それを躊躇した。

部屋に入った直後は、薄暗くて判らなかつたが・・・戸にびっしりと、紙の札が貼り付けられているのだ。良く見てみると、それら一枚一枚には、毛筆で文字や記号のような文様が描かれており、つい先ほど、立花が白夜に襲い掛かろうとしたときに使っていた護符と、似たものだった。

それは、戸だけではなかった。壁面、柱、梁や天井に至るまで、隙間無くびっしりと護符が貼り付けられていた。

「これは・・・結界か！」

「ご明答。立花特製の退魔結界です。白夜君・・・と言いましたねえ。『人ならざるモノ』である君が、うかつにそれに触れると、火傷しますよ。」

「・・・夕紀をどうするつもりだ？」

「安心してください。夕紀さんには一切、危害は加えるつもりはありません。用があるのは、白夜君、君だけですから。」

帝が、徐に薄暗い室内の最奥にある神棚に足を運ぶと、そこに奉られている、一振りの刀を手にとった。刀の柄や鞘の部分には、周囲の壁や天井と同じように、護符がびっしりと貼り付けられており、『人ならざるモノ』が触れられないようにする為であることが見て取れた。

「『人ならざるモノ』は、世を乱す元凶・・・よって君には、ここですべて貰います。」

帝がゆっくりそれを鞘から引き抜くと、鈍い光を放つ淡い瑠璃色の刀身が現れた。

「その光・・・妖刀か！」

「ご名答。妖刀『斬鬼丸』・・・龍禅法師が、九十九の鬼を斬った、龍禅寺家に代々伝わる宝刀です。」

帝は鞘を投げ捨てると、妖刀の切先を白夜に向け、構えた。

「さあ・・・始めましょうか！」

——龍禅寺 帝と、白夜との戦いが始まった。

「白夜！白夜あ！」

古屋の中から、争うような物音が聞こえ始めた。きっと白夜と帝が、中で戦っているのだろう。

古屋の戸口に、夕紀は拳を何度も戸に叩きつけて叫んだ。しかし、何度白夜の名を呼んでも、部屋の中から彼女の応答はなかった。

「どうして・・・どうして、こんな事をするんですか！」

涙目になりながら、夕紀は立花に訴える。

「夕紀さん、『人ならざるモノ』は、人に災いしかもたらしません。」

「そんな事ない！白夜のような・・・優しい子だって、きっと中にはいるはずよ！」

「・・・では、白夜さんがあなたの元に来てから、あなたや、あなたの周りの人間が、事件や事故に巻き込まれたりしたことはありませんでしたか？」

「え・・・」

——確かに、夕紀には思い当たる節があった。

思い返せば、夕紀が銀行強盗の現場に出くわした事件にせよ、その翌日、千歳が誘拐された事件にせよ、災難に出くわす時は、いつも白夜が傍にいた時だった。

白夜が、事件を引き起こしている・・・？

「その様子だと、凶星のようですね。」

「で、でも、白夜は・・・私や、千歳を悪い人たちから守ってくれた！」

「・・・災いを引き起こすのは、『人ならざるモノ』の存在、そのもの。本人の意思は全く関係ありません。仮に、彼女に全く悪意は無かったとしても、彼女・・・白夜さんの存在自体が、周囲の人間に厄災を呼び寄せてしまうのです。」

「そんな・・・！」

夕紀は首を横に振って、何かの間違いだと、何度も何度も自身にそうに言い聞かせた。

——でも、白夜のせいにしてしまえば、立て続けに夕紀と千歳に災難が降りかかった、説明がつく・・・

心の片隅に、そう思える自分がいて、夕紀は自身が許せなくて、

やるせない気持ちになった。

「そんな事ない・・・そんな事・・・もし、そうだとしても、それでも、私は、白夜と一緒に・・・！」

「・・・それが、あなたや、あなたの周りの人間の命を奪う事になったとしても、ですか？」

立花のその言葉は、夕紀の心を、深くえぐった。

——私が、白夜の傍に居ると、千歳が、が死ぬ・・・？

夕紀は、その場がくりと膝をつく。瞳から涙が止め処なく溢れ出した。

「いや・・・そんなの・・・いやだよ・・・」

「判ってください、夕紀さん。私達にはこうするしか、ないんです。」

夕紀はただ、ただ、声をあげて泣いた。

第二話：鎌鼬

※注意！挿絵が有ります

——それは『舞』だった。

美麗で、優雅で・・・それでいて、冷徹なる殺意に満ちた、危うき舞。

その鋭く研ぎ澄まされた、太刀筋に込められた殺意は、ただ目の前の敵を討つ為に振るわれており・・・それだけで白夜は、この龍禅寺 帝という男が、相当な剣の使い手であること伺い知れた。

「ぬう！」

「どうしました、逃げるだけで精一杯ですか？」

室内は二人が戦うには、十分な広さだった。元々、その為に用意された場所なのであろう。白夜は、帝の連続で繰り出される斬撃を、紙一重でかわしていくが、容赦ない攻撃は、じわりじわりと白夜を追いつめていった。

「見事な太刀筋だな。どこで身に着けた？」

ただ単に戦い慣れた者の体捌きではなかった。きわめて実戦的な・・・しかも、人以外の戦闘を想定した訓練を受けたものの動きだ。

「龍禅寺家は代々、退魔師を生業としていましたね。私はそれを幼少の頃から、徹底的に叩き込まれているのですよ。」

さすがに一筋縄ではないかな、と、白夜は思った。これまで戦った相手とは、決定的に格が違っていた。

「さて、今度は、こちらから行きますよ？」

妖刀・『斬鬼丸』による、幾重もの斬撃が、白夜に襲い掛かる。

白夜は、持ち前の素早い身のこなしでそれをかわすと、体勢を低くして、帝の軸足目掛けて足払いを仕掛ける。しかし帝はそれを預期していたのか、素早く跳躍してそれをかわすと、同時に空中から、自らの体重を乗せて一気に白夜の頭上を目掛けて振り下ろした。

「くっ!？」

白夜は身を翻して水平に逃れ、間一髪、帝の渾身の一撃を回避する。数瞬まで白夜のいた場所が、一直線に裂けて、古屋の床面にぱっくりと深い溝が出来た。

その威力に、流石の白夜も、背筋が凍りついた。

「ふむ、いい動きです。しかし・・・この状況下で、いつまで持ちますかねえ？」

帝は、徐に立ち上がると、ニヤリと不気味な笑みを浮かべると、妖刀の切っ先で空中に弧を描いて、再びを構えた。

だが、帝の言うとおりであった。相手が人間であるとはいえ・・・
・対魔結界によって隔離されたこの室内においては、妖刀を携えた帝の方に利がある。

そして何よりも・・・

——白夜は、自分の肉体に、妙な違和感を感じていた。

「この圧迫感・・・結界の影響か。」

「その通り。立花が作り出したこの結界には、『人ならざるモノ』を寄せ付けただけでなく、その力を封じる効力も持っているのですよ。並みの者なら、動く事すらままならない程の、強力な結界なのですが・・・この場所で、ここまで戦える相手を見たのは、君が初めてですよ。」

確かに、白夜は、先ほどから何度も、『人ならざるモノ』の化身である、獣の姿に変身しようと試みているが、それが出来ないでいた。

「なるほど、な。人なりに、知恵を働かせた訳か。」

白夜は余裕の笑みを浮かべて見せたが、内心、焦りを隠なかった。再び、帝の『舞』が白夜を襲う。白夜は攻撃から逃れつつも、全神経を集中させると、白夜の白い長髪が、蛇のようにうねりだし、帝の四肢に襲い掛かった。

——良かった、髪による攻撃は使えるようだ。

「ぬう!」

流石の帝も、これは予想外だったのだろう。帝の両手、両足には、白夜の白髪がしつかとばかりに絡み付いて、身動きが取れない状態に陥った。

「終わりだ！」

そこにすかさず、白夜は渾身の掌手を、帝の腹部目掛けて打ちこむ——！

——勝った。

白夜は勝利を確信した。

しかし。

「何・・・！」

白夜の手は帝に触れる事無く・・・掌手は、見えない力によって阻まれ、帝のみぞおちの手前、僅か数センチの所で止まっていた。帝の口元が、ニヤリと晒う。

それに気付いて、白夜は慌てて、帝から距離を取る。次の瞬間、帝は妖刀で、両手両足に巻きついた髪を斬り裂いた。

「フッフ・・・危ないところでした。」

「貴様、何をした！」

帝は自らの着物を一枚、脱ぎ捨て、上半身裸の状態になった。細身でありながら、鍛え上げられ、磨きぬかれた逞しい肉体が露になる。そして、白夜の掌手の一撃が命中するはずであった腹部には、さらしが巻かれており、それには部屋壁の壁に貼り付けられている護符と同様の、文字や文様が描かれていた。>i14371—1515<

「対魔結界・・・！」

「こんな事もあるのかと、用意しておいて正解でした。」

白夜と帝は再び身構えると、しばしの間、にらみ合いが続いた。沈黙が続いてた後、帝がぼつりと、口を開く。

「ところで、君のその『白夜』という名前は、夕紀さんが付けたものですか？」

「だったら、何だ。」

それを聞いて、帝は少し残念そうな表情を見せた。

「やはり、そうですね・・・」

「？」

「君は、『人ならざるモノ』でありながら、名を付けられるという事がどういう事を意味するのか、知らないようですね。」

「どういう事だ・・・！」

「・・・君は、『理脈』というものを、知っていますか？世の中に起こる全ての事象は、『理脈』という、自然界の秩序を司る、気の流れによって左右されています。本来、自然界に存在するはずの無い『人ならざるモノ』は、その存在自体が、理脈に歪みを生じさせてしまうのですよ。そして・・・人が『人ならざるモノ』に、名を与える事で、関わりを持つ事・・・その行動が理脈に歪みを生じさせ・・・人や、その周囲の人間達に、通常では殆ど起こり得ない事象・・・たとえば事件、事故、災害といった、様々な災難を引き起こす要因となりかねないのです。」

「『人ならざるモノ』が、そのような不幸を呼び込む・・・と？」

「君には覚えがありませんか？あの少女と一緒に居て、彼女が危険な目に遭遇したことが。私には、立花のような、特殊な力はありませんが、龍禅寺家の血筋を受け継ぐ人間には判るのですよ。白夜君の周囲に生じる、理脈の歪みがね。」

「・・・ハッターだ。」

「そう思うなら、それで結構。しかし、仮に君がここで私を倒し、生きて外に出られたとしても・・・可愛そうに。あの少女は、これから死ぬまで、数々の厄災をその身に受けることに・・・」

「黙れ！そんな話には乗せられんぞ！」

「フフフ、さあ？果たして、どうですかねえ？」

帝の顔が、いやらしく嘲った。さらに、帝が挑発してくる。

「しかし・・・理解に苦しみますねえ。君ほどの者ならば、姿を変えることなど容易い事でしょうに、何故、そのような少女の姿をしているのです？」

「・・・お主の知った事では無かろう。」

「それとも、その少女の姿・・・夕紀さんが望んだ姿ですか？」

「関係ないと言っている！」

「だが、この結界の中では姿を変えることは叶わない以上、その姿のせいで、君は今、窮地に立たされている。君は、主人である、夕紀さんの望む姿を取っているだけだと言うのに・・・フッフ、皮肉なものですね？」

帝の言葉は、ひとつひとつ的を射ていて、白夜は、それが余計に腹立たしかった。

「黙れ・・・」

白夜は、更に鋭い眼光で、帝を睨みつける。

「しかも、君がどんなに努力したところで、君が夕紀さんの傍に居る限り、それが夕紀さん幸せに結びつく事は・・・永久にない。」

「黙れ！！」

気が付くと、白夜は帝に殴りかかっていた。自分を抑える事が出来なかったのだ。

けれど、頭に血の上った白夜の直線的な攻撃は、帝にあっさりと見切られ、容易くかわされてしまった。

「どうしたのです？ 攻撃が随分と直情的になりましたねえ？」

「うわあああああ！」

すかさず白夜は、立て続けに次の攻撃を繰り出す。だが帝は、白夜の攻撃を、闘牛士が牛を操るが如く、ことごとくいなしていた。

これは罠だ。

それは、判っていた。

——けれど。

抑える事が、出来なかった。

——そう。

うすうすは感付いていた。本当の事を言えば。

夕紀と千歳が遭遇した、何の関係もないはずの、二つの事件。

けれど、その事件の中核には、白夜がいて……

信じたくなかった。いや、認めたくはなかったのだ。

自分が、夕紀達に、厄を招いていたなどと。

あの夜。裏山で初めて夕紀と出会って、白夜の差し出した獣の手に、彼女が触れたあの時から、夕紀の運命の歯車は狂ってしまった……いや、狂わせてしまったのだ。他でもない自分自身が。

「どうしてそうまでして、あの少女の事を気にかけるのです？」

白夜の連続攻撃をかわしつつ、帝が更に挑発する。

「約束した！夕紀と……何があっても、傍に居ると！夕紀を守る
と……！」

「成る程。しかし、残念ながら、それは叶いません。君は此処で死ぬのですから。」

白夜の攻撃を全て避けきった帝は、後方へ跳んで白夜から距離を取る。お互いの攻撃が届かないほどの距離まで引き下がる、帝が空中に弧を描き、妖刀を上段に構えた。

刀身が帯びる、淡い瑠璃色の光が、いっそう輝きを増してゆく。

やがて光は収束して空色の炎になり、それが刀身全体を包み込んだ。

「白夜君……君が、夕紀さんの為に出来る事が有るとするならば、それはたった一つだけです。」

「何……！」

「それは、君が……」

帝が妖刀を上段に構えると、

「ここで私に斬られる事です！」
一気にそれを振り下ろした。

次の瞬間、白夜の体を、何かが駆け抜けて……
結界部屋の中に、血の華が咲いた。

「ぐあ……!？」

胸に激痛が走る。

白夜は片膝をついた。

胸には大きな太刀傷が出来ていて、衣服は血が滲んでいた。

――斬られた……？

――あんな、距離から……？

傷は浅く、致命傷には達していないようだった。けれど、あの瞬間、何が起こったのか判らず、白夜の頭は混乱していた。

二人は5メートルほどの距離を挟んで、対峙していたはずである。

帝の斬撃が、白夜に届くはずが無い。それなのに……

「鎌鼬……か！」

「フフ、正解です。まあ、これは斬鬼丸の力の、ほんの一部に過ぎませんが、ね。」

帝が、ゆっくりとした足取りで、白夜に歩み寄ってくる。

逃げなければ……

白夜はその場から、後方に跳び退こうとするが、全身が重く、立ち上がる事すらできなかった。

妖刀によって手傷を負わされた事で、結界の影響が顕著に表れてしまったのだろうか。体の自由は、完全にと行って良いほどに奪われていた。

「くっ！」

「さて、君はどんな声で歌ってくれるのですねえ？」

帝は片膝をつく白夜の胸倉を掴み上げると、そのまま白夜の体を、壁面に張られている結界に押し付けた。

「ぐあああああ！」

背中が灼ける様な激痛に襲われ、白夜はたまらず悲鳴を上げた。手足をばたつかせて必死に抵抗するが、それでも帝はその手を緩めようとはしなかった。

「夕紀さん。人と人ならざるモノとは、決して相容れぬ存在。交わってはならない存在なのです。判ってください、とは言いません。でも、私は夕紀さんに、私のような目に遭って欲しくないのです。」
すすり泣く夕紀に、立花が寂しそうな声で語りかける。夕紀は、頬を伝う涙を拭わぬまま、泣きっ面を立花のほうにに向けた。

——立花の俯いたその顔は、深い悲しみに満ちていた。
きっと、立花も、両親を失って、さぞかし辛い思いをしてきたのだろう。

両親と離れて暮らす夕紀には、彼女の気持ち、少しだけ判る気がした。学校から帰っても、迎えてくれる家族は仕事で家に居なくて、寂しいと感じ事が、これまでに幾度もある。

——けれど・・・

「白夜は・・・どうなるの・・・？」

「・・・残念ですが、彼女は生きて此処から出ることは出来ません。」

その言葉に、夕紀の表情が凍りつく。

「『人ならざるモノ』の能力を封じる、この結界部屋は、私が数年の歳月をかけて築き上げたものです。決して、破られる事はありません。そして、何よりも・・・お兄様には『妖刀・斬鬼丸』が有りますから。」

「妖刀・・・？」

「『人ならざるモノ』を屠るためだけに作られた、対魔刀です。」
「そんな!？」

——白夜が、死ぬ？

夕紀はふと、これまでの白夜との日々を思い返した。

白夜と出会って、まだそう長い月日経っている訳ではないが、夕紀は白夜にどれだけ甘えていただろう。逆に、どれだけの事を、彼女にしてやれた？

銀行強盗の現場に居合わせた時だって、白夜が事態を鎮めてくれなければ、今頃、無事ではいられなかっただろう。事件の後、白夜は言った。

「お前は無力な少女のままでいい、ワシが守ってやるよ。」と。

その時は、白夜がそう言ってくれた事が、ただ単純に嬉しかった。

——けれど、それでいいのだろうか？

今、その白夜は死の危機に瀕しているというのに、自分はただ泣いているだけで、何もしていないではないか——

「私は、周りの人が、死ぬところなんて・・・見たくない・・・」

夕紀は、ぽつりと呟いた。それは紛れもなく、本心から出た言葉だ。

「夕紀さん。判ってくれましたか。」

「でも、白夜が死ぬところなんか、もっと見たくない！」

夕紀は決意した。

涙を拭って、その場から立ち上がり、立花に掴み掛かった。

「きゃあっ！」

不意をつかれた立花は体勢を崩して、その場でしりもちをついてしまう。すかさず、夕紀は彼女の体に馬乗り状態になって、押し掛かる。

判っている。これは、白夜の命と、身の回りの人々の命を、天秤

にかける行為だ。

——けれど。

「そんな！その為なら、他の人の命を顧みないと言うんですか?!」
「今、やれる事をやらなきゃ、必ず後悔する事になる。私は、そんなのはイヤ!」

夕紀は、先ほどまで号泣していたとは思えないような、勝ち誇ったような強気な態度で、立花に押し迫った。

「さあ、鍵を渡してもらいましょうか?」

「だ、誰が・・・!」

「ふーん、あ、そう。それじゃあ、仕方ないよねー。」

夕紀が両手の指をタコのようにワキワキとうねらせる。

「ひっ!」

それを見てびっくり、と立花の体が飛び跳ねる。そして、ゆっくりと彼女の巫女服の隙間に手を・・・。

「え、ええええ!? ちょ、夕紀さんっ、や、やめっ・・・!!」
不敵な笑みを浮かべる夕紀に、立花の顔が一気に青ざめた。

「ひ、ひい・・・!」

立花の甲高い叫び声が、神社の境内に響いた。

——その数分後。

「待ってて、白夜。今、助けるから。あ、あれっ?」

夕紀は、奪い取った鍵で、古屋の戸を開けようとしていたが、上手く鍵穴に差し込めず、悪戦苦闘していた。

そんな夕紀をよそに、夕紀に弄ばれ・・・自慢の巫女服もはだけてしまい、地に伏してすすり泣く、立花の姿があった。

「夕紀さん・・・私は、あなたを恨みます・・・っ!」

「ごめんね、立花さん・・・白夜は私の大切な家族なの。」

「家族・・・」

立花はどこか、遠い目をしていた。

夕紀は戸の鍵を外すと、力任せに戸を開け放った。

「白夜！」

帝が狂気に満ちた笑みを、夕紀に向けた。

「一步、遅かったですねえ、夕紀さん。」

その手には、血の滴り落ちる日本刀が握られおり……。

「あ……！」

彼の足元には、血で衣服を真っ赤に染めて横たわる、白夜の姿があった。

第三話：変幻

※注意！挿絵あります

「白夜、白夜あ！」

夕紀は、慌てて白夜の元に駆け寄り、横たわる白夜を抱き起こして、必死に呼びかけた。衣服は既にぼろぼろで、胸には大きな太刀傷が生々しくつけられており、背中や、体の至る所に火傷のような傷痕が無数にできていた。

「ぐ……っ、ゆ、夕紀……」

「白夜……！」

白夜は、ひどくかすれた声で、夕紀の呼びかけに辛うじて応えた。良かった、まだ息がある。

「ひどい、ひどいよ！どうして、こんな……！！！」

涙目で訴えかける夕紀に、帝は無情に応えた。

「退いていなさい、夕紀さん。止めを刺します。」

帝が、その手に握られた、抜き身の日本刀を振り上げる。その刀身には瑠璃色の光が宿っていた。

——あれが、立花の言っていた妖刀『斬鬼丸』なのだろう。

「立花から聞いたのでしょうか？白夜君のような存在が、人にとって、厄災をもたらす害獣でしかないという事を。さあ、そこを退きなさい。今、ここで彼女を始末しなければ、あなたや、あなたの周りの人間が、その代償を支払う事になるのですよ？」

「退かない！仮に白夜が、不幸をもたらす疫病神みたいな存在だったとしても、私は、それを全部乗り切ってみせる！」

さらに夕紀は、帝に訴える。

「……私は、いつも白夜に守ってばかりだった。だから、今度は私が、白夜を助ける番。白夜を信じてるから！！」

「それは、傲慢というものです。あなたは、己のエゴの為なら、他人を犠牲にしても構わない……それと同じ事を口にはしているのですよ？」

「白夜を犠牲にしてまで、得られる未来なんか、要らない！」

「そうですか、わかりました。」

帝が、ゆっくりと妖刀を振り上げる。薄い笑みを浮かべたその表情は狂気に歪んでいた。

「では、一緒に死になさい。」

「に、逃げろ・・・夕紀・・・！！！」

帝が、妖刀を振り下ろそうとしたその時。

「ダメです！お兄様！」

白夜たちの背後から、聞き覚えのある少女の声がすると、帝の手がぴたりと止まった。振り向くと、はだけた巫女装束を、辛うじて整えたばかりの立花が、開け放たれた古屋の戸口の前に立っていた。

「お兄様、どうかそれだけは、やめてください・・・」

「・・・立花、君まで、『人ならざるモノ』の肩を持つのですか？」

帝が振り上げた手を下ろし、制止に入った義妹に顔を向ける。

「そうではありません！私はただお兄様に、人殺しにはなってもらいたくないのです！」

意外な救済者の登場に、夕紀は目を丸くした。

——立花は、帝と共謀して、白夜を陥れて命を奪おうとした張本人だ。

初めて対面したときも、白夜を見るなり、いきなり襲い掛かってきたその彼女が今、義兄を止めるべく、必死に彼に懇願していた。

立花は、結界部屋の中に入り、帝の近くに歩み寄る。

「以前のお兄様なら、絶対に、こんなことはしなかった筈です！私は愚かだった・・・お兄様が、『斬鬼丸』を継承すると知ったとき、

何としても止めるべきだったんです。でも、そのせいで、『人ならざるモノ』と戦う定めにある、龍禪寺家の生まれであるお兄様が、もし命を落とす事になったら……そう考えると怖くて……
……結局、私もまた、妖刀の力に頼ってしまった。」

「けれど、『斬鬼丸』を手にして、お兄様は変わってしまった！お願いです、お兄様、以前の優しいお兄様に戻ってください！」

帝は目を閉じ、小さくため息をいた。

「『人ならざるモノ』を倒し、世の理脈を正す事……それが龍禪寺家に生れたものの使命。私はそのためなら、手段を選ぶつもりはありません。君は忘れてしまったのですか？君が両親を失った、あの日の事を。」

「それは……」

帝の鋭い眼差しが、妹に向けられた。

「しかし。君がそうまでして、邪魔をすると言うのなら……それが妹であろうと、容赦するわけにはいきません。」

斬鬼丸の刀身に、瑠璃色の炎が帯び始めた。

「お兄様……！」

——立花は覚悟を決めた。

人の道を外れようとしている義兄を、何としても止めたかった。止めなくてはならなかった。

そして叫んだ。

「符術・『雲隠』！」

クモガクレ

「なっ！」

立花の背後から護符が一枚、飛び出した。古屋に入る際に、気付かれないよう、立花の背後で、空中に待機させておいた護符だ。護符は帝の顔に張り付き、彼の両目を塞いだ。

「くっ、ぬうう！」

「さあ、夕紀さん、白夜さんを連れて、逃げてください！」

我に返った夕紀は、負傷した白夜を胸に抱くと、慌てて帝の傍を離れた。

「あの、ありがとう、立花さん！それと、ごめんね。」

すれ違い際に、夕紀は立花に、簡単に感謝と謝罪の言葉を口にすると、戸口から急いで外へと飛び出した。

帝が、ようやく顔面に張り付いた護符を剥がし終えると、先ほどよりも更に鋭い眼差しで、義妹を睨み付けた。

「……自分が何をしたのか、判っているのですか、立花。」

立花は、こくりと頷いた。

「私が、お兄様を止めてみせます。」

「それは不可能です。君の十八番である符術の多くは、『人ならざるモノ』にしか、効果を発揮できないという事は、君が一番よく知っているでしょう？」

——事実だった。

立花自慢の対魔結界ひとつ取っても、普通の人間にとっては何の効力も発揮しない、ただの紙切れにしか過ぎない。

けれど………

「そんな事は、関係ありません。」

「ふう………仕方ありませんねえ。」

帝は大きくため息をつく、妖刀を大きく振りかざした。

夕紀は走った。白夜の血が、自分の衣服に染み付くのも構わず、白夜を抱えて、神社の外へと。

白夜の体は、思っていてよりずっと軽かった。こんなにも小さな少女が、ついこの間、銀行強盗三人を相手に、体一つで倒してしまったというのだから、夕紀は改めて、白夜がとんでもない力を秘めた、人とは違う存在なのだと実感した。

——けれど、その少女は今、深手を負わされ、弱々しく夕紀の腕の中で、苦痛にうめいていた。

「ゆ・・・夕紀、ワシはお主に・・・謝らなければならぬ・・・」

帝との戦いで、心身共に消衰しきってしまったのか、白夜は、今にも途切れそうなか細い声で、夕紀の背中に語りかけた。

「白夜、喋らないでいいから。」

「・・・お主や・・・千歳が、事件に、巻き込まれたのは・・・ワシが、傍に居たからなのだ・・・」

夕紀は息を呑んだ。きつと白夜も、夕紀が立花から聞いた話と同じ事を、帝から聞いたのであろう。

「ワシが・・・いたから・・・すまぬ、夕紀。すまぬ・・・」

傷が痛むのか、白夜の小さな体が、小刻みに震えているのが判った。そんな白夜を見るのは初めてで・・・夕紀は、白夜を必死にフォローした。

「そんな、謝らないでよ白夜！私だって、白夜に迷惑かけてばかりだし・・・それに、あの人たちが言ってる事だって、本当だとは限らないじゃない！」

ただ、贖罪の言葉を並べる弱気の白夜を、夕紀は否定してみせた。

「そうだな・・・すまぬ・・・」

夕紀は、神社に来るときに通った道を外れて、雑木林の奥に身を隠し、白夜を休ませる事にした。だが、まだ安心は出来ない。いつ帝が追いかけて来ても、おかしくはなかった。

夕紀は白夜を抱えたまま、木の幹を背をもたれた。

「痛む？白夜。」

「ああ・・・だが、少し休めば平気だ。」

「ごめんね・・・白夜。」

今度は夕紀が、白夜に謝りだした。

「どうして、お主が謝るのだ・・・？」

「だって、そもそも・・・私が、お参りに行こうだなんて、言わなきゃ、白夜だって・・・こんな酷い目に遭わなくて済んだのに・・・」

夕紀の瞳が、涙で滲む。

「・・・」

「それに・・・帝さんの言葉を、私が、全部、う、鵜呑みにしたり、しなきゃ・・・えぐっ、白夜ぁ・・・！」

頬を伝う雫が滑り落ちて、胸に抱いた白夜の頬を濡らした。

「お主は・・・、それは、お互い様だと、さっき、自分で言っただけではないか。」

ぐずり出す夕紀を、白夜はなだめるように囁いた。

「でも・・・でもお・・・！」

「もう泣くな・・・ワシなら、大丈夫だ。な？」

白夜の手が、夕紀の頬に触れて、涙の痕を拭った。

「うん・・・ありがと・・・」

暫しの沈黙が訪れる。

夕紀が寄り道を提案してから、そう長い時間は経っていないはずだが、夕紀たちには、それがとても長い時間であるように感じた。気が付くと、空は夕焼けで真っ赤に染まっており、夕日が辺りの風景を、赤く染めていた。

「夕飯の材料、神社に置いてきちゃったね。」

「そうだな。まあ、仕方あるまい。有り合わせの材料で、何か作るさ。」

「ええ？でも・・・その怪我じゃ・・・」

白夜は、夕紀の膝の上から、おもむろに立ち上がると、あちこち

自分の体を確認する。

「ふむ、もう大丈夫のようだ。」

「ええ！？ あんなに酷い怪我だったのに！？」

確かに、胸の太刀傷は既に何処にも見当たらず、背中の大きな火傷の痕もすっかり消えて、元通りの、綺麗な白い肌が戻っていた。

「本来、この程度の怪我なら一瞬で再生するところだが、あの結界がワシの能力を封じていたようだ。お陰で、姿を変える事すら叶わなかった。帝という男もさることながら、あの娘・・・立花とかいう少女も、なかなか侮れぬな。」

「そっか・・・」

夕紀は、身を呈して逃がしてくれた立花の身を按じた。

「立花さん、大丈夫かな。」

「見たところ、あの娘も、相当な使い手だ。容易くは、やられまい。」

「うん、そうだね・・・それにしても・・・」

「？ 何だ？」

「あの巫女服、白夜に着せてみたいなあ・・・」

いつの間にか夕紀は、妄想モードに入って、だらしなくヨダレを垂らしていた。

「ちょっと待て、何で今の話で、その流れになるのだ？！」

二人はしばらく顔を見合わせると、一緒に吹き出して、笑った。

少し休んで元気が戻ったお陰だろうか、二人の間に、いつもの空気が戻っていた。

休憩を終えて、二人がその場を離れようとしたそのとき、茂みの奥から聞き覚えのある、男の声がした。

「やあ、ここに居ましたか。探しましたよ。」

現れたのは、龍禅寺 帝だった。その手には、抜き身の妖刀が握られている。

「お主・・・！ 立花は、どうしたのだ！？」

「フフフフ……さあ？」

帝は妖しい笑みを浮かべると、刀身に付着した血を、ぺろりと舐めとった。

「そんな……！」

それを見た夕紀は、最悪の事態を想像して、凍りついた。

「落ち着け、夕紀。まだ、立花が死んだとは限らん。」

「う、うん。」

『斬鬼丸』の刀身を、再び瑠璃色の炎が包み込んだ。

「さあ、宴の続きを始めましょうか？」

帝が『斬鬼丸』を上段に構える。白夜に傷を負わせた、あの技・
・『鎌鼬』を放った時と同じ構えだ。

「夕紀、耳を塞いで、伏せていろ。」

夕紀は白夜の言われたとおり、耳を塞いで、その場にしゃがみこんだ。

「無極……双閃！」

帝がそう叫ぶと、上段に構えた妖刀を力任せに振り下ろし、さらに返しの一振りをも、続けざまに放つ。見えない二筋の真空の刃が、白夜たち目掛けて放たれた。

迫り来る鎌鼬を前に、しかし白夜はその場を一步も動こうとはせず、正面を向いたまま目を閉じ、すうっと息を大きく吸い込んだ。

——やがてそれが、白夜たちの目の前に差し迫ったとき、

白夜が吼えた。

人間の可聴域を超えた『それ』は、音速の衝撃波となり、地面の塵を舞い上げながら、帝に向かってけて直進する。『それ』は、向かい来る鎌鼬を打ち消しても、勢いを少しも衰えさせることなく、帝に襲い掛った。

危険を察知した帝はとっさに身構え、何とか持ちこたえようとし

たが・・・衝撃波を真正面を受けた帝の体は、風に煽られた木の葉のように宙を舞い、遙か後方の木の幹に背中から激しく衝突して、ようやく停止した。

——周囲の空気が、木々が、大地が、白夜の咆哮の前に震えあがった。

「白夜・・・!？」

間近でそれを見ていた夕紀は、白夜の体に起こっている、ある変化に気が付いた。

——白夜の風貌が、変わっているのだ。

身長は、夕紀よりも頭一つ分ほど高くなっており、顔立ちも、幼さなど微塵も感じられない、美しく・・・そして凜とした、女性の顔へと変化してた。

体の一部は雪のような白い毛で覆われていて・・・頭には獣の耳のようにも見える、毛に覆われた突起が二つ。美しく、流れるような曲線を描いたメリハリのあるボディラインは、出るところは出ており、夕紀的には、それが少し面白くなかった。

そして、最大の特徴は・・・

「あ・・・、尻尾・・・。」

すらりと細く、長い尻尾が、お尻から生えていた。

「ふむ、結界の影響が残っているのか・・・やはりまだ、完全な姿には、程遠いようだな。」

白夜は変化した自分の体を確認すると、窮屈になってしまった衣服を引き裂いて、自分の胸と腰に巻きつけた。

「く・・・っ、化け物め・・・!」

衝撃波で吹き飛ばされた帝が、よろめきつつも立ち上がる。全身をひどく打ちつけ、全身傷だらけになりながらも、怒りの表情を露に

し帝は、斬鬼丸を握り締めると、瑠璃色の炎は、よりいっそう大きく膨れ上がった。>i14382—1515<

「どうやら、本気にさせてしまったようだな。夕紀、離れている。」

「私、神社に戻って、立花さんが無事か、確かめて来る！」

「うむ、頼む。」

夕紀が神社の方向に向かって、駆け出す。が、少し走ったところで、夕紀は振り返って、

「あ、そうだ、白夜。」

「・・・何だ？」

「帰ったら、またソフトクリーム食べに行こ！」

白夜はその言葉に、しばし呆気にとられた表情を見せたが、やがて夕紀に微笑みかけた。

「ああ、期待してる。」

夕紀もそれに対し、親指を立ててつつ満面の笑みを白夜に返して見せると、神社に向かって再び駆け出した。

帝が、一気に距離を詰めるべく、前傾姿勢で突進してくる。

対する白夜は、右手を真横に振り上げると、瞬く間に右手の爪が伸びて、それぞれが長さ一メートルほどの、五つの刀身となった。

放たれる帝の渾身の一振りを、白夜は、右手の五本の長爪で、いとも容易く受け止める。

「なんと・・・！」

刃を交えた瞬間に、相手の力量を察した帝は、白夜の長爪を弾いて、再び距離を取った。

「まさか、これほどの力とは・・・白夜君・・・・・・・・君は、一体・・・・・・・・？」

帝の問いに対し、成長した姿の白夜は、毅然とした態度で答える。

「ワシの名は白夜。帝とやら。もし、お主が夕紀に少しでも危害を加える気があるというのならば・・・・・・・・ワシは、お主を許さぬ。」

└

その表情には、もはや一片の迷いすら、存在してはいなかった。

第四話：鬼

夕紀が間もなく神社に辿り着こうとしていたとき、神社の鳥居に身をもたれている人影を見つけた。巫女服につやのある黒髪の少女・
・・・・見紛うはずもない、立花だ。

「立花さん！」

立花の元に駆け寄る夕紀。だが、すぐに異変に気付いた。

「夕紀さん・・・・・あぐっ・・・・・！」

「！・・・・・ひどい怪我！」

彼女の白い巫女装束の右肩部分はぱっくり裂けていて、傷口を押さえる手も血で紅く染まってしまっていた。息づかいが荒く、額には汗が滲んでいる。傷を負った体に鞭を打って、自力でここまで歩いたのだろうか。

「夕紀さん、お願いがあります・・・・・私を、お兄様の元へ、連れて行ってください。」

「ダメよ、ちゃんと病院行って、手当てしなきゃ！」

とても、これ以上は歩けるような状態でない事は、夕紀でもすぐに判った。だが、立花は夕紀の胸元にすがりつき、瞳を潤ませて懇願する。

「お願いです、夕紀さん、お願いします・・・・・」

立花に泣きながら抱きつかれ、夕紀はさすがに困惑したが、やがてその熱意に根負けしたように、はあ、とため息をついた。

「・・・・・わかった。でも、応急処置が先だよ。それから、一緒に行きこう？」

「はい、ありがとうございます・・・・・」

夕紀は立花に肩を貸し、境内にある休憩所の中に入った。

「うっ・・・・・！」

普段血を見ることに慣れていない夕紀は、立花の肩の傷口を見て、

思わず顔をしかめた。そういえば、傷の当てなんてした事がない事に、今更ながらに気付く。

「えっと、まず、どうすればいいんだっけ……」

「わ、私が教えますから、その通りに、お願いします。」

着物を脱いで、背に向けた立花は、痛みを堪えつつも夕紀に手当てを依頼する。

それを見て、夕紀も覚悟を決めた。そうだ、立花だって辛いのだ。血を見るのが苦手だなんて、言っている場合ではない。

「う、うん。」

立花の的確な指導のお陰で、なんとか応急処置を終えることが出来た。幸い、傷はさほど深くはなかったようで、傷口に消毒と止血だけを施した。

「私、帝さんの事、許せないよ………白夜だけじゃない、立花さんにまでこんな怪我させて………」

夕紀は、新しい着物に着替えている立花に背を向けて、拳を震わせながらそう洩らした。その様子を見て、立花がたしなめる様になる。

「お兄様の事を、どうか悪く言わないであげてください。」

「でも………」

「斬鬼丸は、その気で使えば、一振りで巨木を薙ぎ倒すほどの威力があるのです。こんな風に、浅い傷をつける事の方が、むしろ難しいものなのです。」

「だけど！」

義兄を弁護する立花に、夕紀は食い下がった。そうだ、たとえば手加減していたとしても、家族に刃を向けるなんて、決して許されるはずがない。

「それに………」

けれど立花は、耳を疑う事を口にした。

「お兄様が、ああなってしまった原因の一つは、私なんです。」

「え・・・・・・・・・・？」

夕暮れに紅く染まる、雑木林の中。

刃と刃がぶつかり合う、甲高い打撃音が幾度となく響き渡り、対峙する白夜と帝との間に、無数の火花が生まれた。

——周囲の状況が、戦いの激しさを物語っていた。

地面はあちこち抉られ、周りには白夜の長爪や、『斬鬼丸』の斬撃によって薙ぎ倒された木の幹が、何本も転がっていた。

いっそう甲高い音が響いて、二人は鏖迫り合いの状態で均衡する。——だが、戦況は五分ではない。

涼しい顔で、呼吸ひとつ乱していない白夜に対し、帝は全身傷だらけで砂埃にまみれ、すでに肩で息をしているような状態だ。

帝は焦っていた。対魔結界の外に逃れた白夜が、まさかこれ程の力を秘めていたとは、帝にとって想定外だったのだ。それだけに、子供の姿から、美しき獣人に姿を変えた白夜の力は、圧倒的だった。力も、速さも、以前の姿とは比べ物にならない程の域に達しており、これまで帝が相手にした、どの異形の者達をも凌駕している事は明らかだった。手負いの獅子に止めを刺そうと、結界の外で勝負を挑んでしまった事を、帝は後悔した。

突如、どこからともなく現れた数本の鎖が、鏖迫り合いを続ける帝に襲い掛かる。

「ぬうッ！」

意表を突かれた攻撃に、帝は慌てて長爪を押し返し、自らも後方へ跳び、白夜から離れる。迫り来る鎖を、『鎌鼬』で薙ぎ払って撃退するが、一度は撃退した鎖は再び向きを変えると、勢いよく帝に向かって伸びる。その様子は、さながら獲物を執拗につけ狙う、毒蛇を思わせた。よく見ると、鎖は白夜の背後から伸びており、彼女

の長い銀髪の一部を変化させたものと判る。

雑木林の中を疾駆し、追尾する鎖から逃れながらも、帝は『鎌鼬』を飛ばして迎撃を試みる。だが、いくら帝が音速の風刃で薙ぎ払っても、その堅牢な鎖を断ち切る事は出来なかった。『斬鬼丸』が放つ『鎌鼬』は、直接斬りつけるよりも、その威力は遥かに劣るからだ。先の戦いで、結界部屋で、『鎌鼬』を受けた白夜に致命傷を負わす事が出来なかったのも、決して帝が手加減していた訳ではなく、その『鎌鼬』の性質ゆえだったのだ。

かといって、鎖に向かって直接斬りかかるには、あまりにもリスクが大きかった。鎖の一本に狙いを定めれば、たちまち他の鎖の餌食となってしまうだろう。

逃げ回るうちに、追尾する鎖はいつしか数を増し、全部で四本の鎖が、不規則な軌道を描いてありとあらゆる方向から帝に襲い掛かる。縦横無尽襲い掛かる鎖から、辛うじて逃れ続ける帝だったが、それも束の間。一本の鎖が帝の足首を捕らえたのを皮切りに、残りの三本の鎖が、帝の四肢を何重にも束縛した。きつく巻きつけられた冷たい鎖は、帝がどんなに力を入れて抜け出そうしても、びくともしない。そこへ、長爪の刃が伸びていない、白夜の左手が鋭く突き出され、帝の腹部の退魔結界をたやすく突き破ると、そのまま白夜の掌手は帝のみぞおちにめり込んだ。

「ぐはあっ！」

帝の顔が苦悶に歪む。呼吸困難に陥り、束の間、意識が宙へと舞った。同時に、鎖による結束が解かれたことで、帝はその場に倒れ込んだ。妖刀が纏っていた蒼炎はいつの間にか消え失せ、帝は地面で腹を押さえて苦痛にうめいた。

「……………終わりだ。これ以上戦っても、勝ち目がないこと位、お主とて判っておろう？」

うずくまり悶絶する帝に、白夜は言った。だが、帝は妖刀を杖にして、そのおぼつかない足腰で、どうにか立ち上がろうとする。白夜を見据えるその眼は、未だ戦意の灯火を消してはいなかった。

「ゲフツ、ゲフツ……た、確かに、現状では、万に一つも、わ、私には勝ち目は、ないでしょうね。」

「ならば、なぜ戦うのだ？」

なおも戦う意志を見せる帝に、白夜は以前から感じていた疑問を、帝に投げかけた。

——なぜこの男が、これほどまでの執念をもって、『人ならざるモノ』と戦おうとするのか、それが知りたかったのだ。

「……お主の妹が、『人ならざるモノ』を憎むのは判る。だが、お主は言ったな？ ワシらを倒し、理脈を整するのが、龍禅寺家とやらの使命だと。だが、お主がそのような状態になってまで、戦い続けようする意図が、ワシにはどうしても見えぬ。」

帝は目を閉じ、沈黙する。

「……私にも、意地というものが、あるのですよ……」

「全ての始まりは五年前の事でした。お兄様と同じく、対魔師を生涯としていた、私の義父様が、『人ならざるモノ』との戦いで、重傷を負ってしまったのです。」

立花の応急処置を終え、神社を出て、白夜と帝が対決しているであろう場所へと向かう道中、彼女は語った。

「自らの命がそう長くない事を悟った義父様は、一族のすべて人間を集め、龍禅寺家の後継者を選ぶ事にしました。しかし、義父様が後継者として指名したのは、長男のお兄様ではなく、養女として引き取られた私だったのです。」

「え……？でも、立花さんって……」

「はい、私にも、最初は訳が判りませんでした……なぜ、

龍禪寺家の血を引いていない、この私が、後継者に選ばれたのか。でも、疑問はすぐに解決しました。龍禪寺家が後継者として、最も重んじていたのは、血筋などではなく、『人ならざるモノ』に対抗するための、異能の力だったのです。」

——帝の剣術の腕は、一族の中でも最強と謳われた程だった。しかし、龍禪寺家が後継者として、最も重視していた資質とは、そのようなモノではなく、生まれ持った神懸りの力だったのだ。帝は、理脈を見通したり、『人ならざるモノ』を気配で識別する事は出来たが、彼らと対等に渡り合えるだけの特殊な力を、何一つ持つてはいなかったのだ。

「それに、お兄様と私には、決定的な違いがありました。私は『人ならざるモノ』によって、両親を失いました。だから、彼らと戦うだけの個人的な『理由』があるのです。彼らとの戦いは非常に過酷で、時には命の危険を伴う事も少なくはありません。いかにお兄様が、『使命』を果たすという責任を背負ったとしても、それだけでは、戦いを乗り切る事はできない……と、義父様は判断されたのでしょう。これは推測ですが……おそらく、だからこそ私は養女として迎えられたんだと思います。」

夕紀は絶句した。その時の帝の心境は、一体どれほどのものだったのだろう。

更に、立花は続ける。

「そして、その翌日、事件は起こりました。お兄様が、社に安置されていた『斬鬼丸』を無断で持ち出し、道場に竈ってしまったのです。それから三日三晩、お兄様が、道場の中から出てくると事はありませんでした。おそらく、一族の誰もが扱うことができなかった『斬鬼丸』を、制御する術を身に着ければ、お父様に後継者として認めてもらえると思ったのでしょう。」

——それから三日が過ぎた日の早朝、帝は、『斬鬼丸』を制御する術を身につけ、道場から姿を現した。しかし、それはもはや、以前の帝ではなかった。『人ならざるモノ』を目の前にしたとき、彼はそれを狩る為ならば、何の手段もいとわれない、非情にして冷徹なる二面性を見せるようになったのだ。その様子はさながら、妖刀の魔力に、心を惑わされたかのような……立花には、そう思えた。

「それで、『斬鬼丸』を扱えるようになった帝さんは、お父さんに認めてもらえたの？」

夕紀の問いに、立花は首を横に振った。

「いいえ、お兄様が家督を継ぐ事はありませんでした……お兄様が道場に籠っている間に、義父様の容態は悪化し、すでに危篤となっていましたのです。その翌日、義父様は……」

その言葉に夕紀は耳を疑う。

「え……！？それじゃ……！」

「はい、『斬鬼丸』こそ、お兄様が継承する事になりましたが、龍禅寺家の本当の当主は、この私……。私はまだ十五歳なので、現在はお兄様が一時的に家督を預かる形で、この神社の神主の職を担っていますが、私が成人した暁には、正式に龍禅寺家を継ぐ事になっているのです。」

「それで、家督を継ぐ事ができなかったお主は、『人ならざるモノ』を狩る事にこそ、己の価値を見い出した、といった所か？」

「フ……フフフ……！、か、勘違いしないで下さい。私にとって龍禅寺家の家督を継ぐ事など、今となっては、何の興味などありません。」

「何……？」

「君は、私に聞きましたね？何故私が、君達『人ならざるモノ』と

戦うのか、と。」

帝が杖代わりにしていた妖刀の切先を、縦に構えた。

「『^{ツクモガミ}九十九神』、というものの名を知っていますか？ 永い時を経て、人の強い想いが込められた道具は、意志を持ち、超常的な力を発揮する事があるのです。」

白夜は、それを知っていた。

——そして、『斬鬼丸』も、その『九十九神』の一種であろうということも。

「それが何だと言うのだ？」

「龍禅法師が使っていたこの『斬鬼丸』も、この私のように何の力も持たない、一振りの刀に過ぎませんでした。しかし、彼が旅の途中で斬った鬼の魂を、符術によってこの刀に封じ込めたことで、異形のモノたちとも渡り合えるだけの強力な力を得たのです。そう……斬鬼丸はね、人為的に作り出された……正に、『九十九神』そのもののなのですよ。」

その事実には、白夜は驚きを隠せなかった。

「鬼の魂を、刀に封じ込めただと……？ それで、『斬鬼丸』の力の正体か！」

「フッフ、その通りです。この妖刀はね、『人ならざるモノ』の魂を喰らい、そして成長する。私の目的はね、白夜君。君達を屠ることで、この『斬鬼丸』の力を、解放する事にあるのですよ。」

帝が妖刀の柄の部分に巻かれた護符を、剥ぎとり始める。

「しかし、その強大な力のゆえ、普段は使い手の魂が、鬼によって蝕まれないようにするため、符術によってその力を抑えているのですが……もはや、この状況では、そうも言っではいられないようです。」

白夜の表情が、嫌悪感を露にする。

「そのようなくだらぬ動機で、ワシらを陥れたというのか！ ただ一人の妹をその手にかけ、夕紀にまで危害を加えようとし理由がそれか！！」

帝が全ての護符を剥ぎ取り終えると、輝きを失っていた妖刀から、蒼炎が爆発的に噴き出し、瞬く間に帝の全身を包み込んだ。

「ええ、その通り……ハ、ハハハ……ッ、その通りですよ！ヒヤハッ、ヒヤハハハハ！！」

——帝の声色が変わった。『鬼』によって、帝の魂が飲み込まれようとしているのだ。

そして、異変に気付く。帝が全身に纏った蒼炎が、死骸に群がる蛆のように蠢き……帝の風貌を変化させようとしていた。

「！……これは！？」

顔は修羅の如き形相へと変貌し、もはや初めて対面したときのような好青年の印象は何処にも見当たらない。以前の細身のシルエットとはうって変わり、全身の筋肉ははちきれんばかりに膨張し、腕や太腿は丸太のように太くなり、太い血管が浮き出ている。胸板も多少の攻撃ではびくともしそうなほどに分厚く発達し、皮膚の色も赤黒く変色して、それが余計に不気味さを際立たせていた。後ろに束ねた髪留めが外れた事で、毛髪はすべて逆立ち、身長はかなり伸びて、2mはゆうに超えているであろう巨軀へと変貌した。

——変貌を遂げた帝の、狂気を滲ませた両眼が、ぎょろりと白夜を見据える。そこには筋肉の重鎧を纏い、ひと回りもふた回りも巨体化した帝が、「グルル」と、低いうめき声をたてながら、そこに佇んでいた。その姿は、正に『鬼』と呼ぶに相応しい。

「ヒヒヒヒ……負ケナイ。見セテクレヨウゾ！斬鬼丸ノ力ハ、無敵ダァ！！」

『鬼』となった帝が、図太く低い声を上げると、斬鬼丸を天に掲げる。周囲に旋風が巻き起こったかと思うと、『斬鬼丸』から、蒼炎が勢い良く噴出し、それが天へと向かってまっすぐ伸びた。やが

てそれは高さ10メートルほどにまで達すると、巨大な瑠璃色の刀身を形成する。あんなものを喰らえば、いかに白夜といえども、無事では済まないという事は明白だった。

「愚かな、心まで妖刀に喰われよったか！」

だが、それでも白夜は怯まない。白夜は左手を真横へ伸ばすと、右手同様、指先からの五つの刀身が生まれた。左右五本ずつ、計十本の刃を、顔の前で交差させると、全身は淡いの純白の光を放ち始めた。

「くだらぬ……『人ならざるモノ』を狩る為に、自らが忌むべきその力に抛りすぎるなど！」

光は白夜の波打つ銀髪や、体の一部に生えた体毛に反射し、白夜の全身は水晶を散りばめたかの様な輝きを帯びはじめる。

「オオ……！」

その神秘的な光景を前に、『鬼』となった帝ですら、感嘆の声を洩らした。

白夜は大きく膝を曲げ、そのまま空中へと飛び上がり、身を翻して帝から離れた地点に着地した。前傾姿勢に身を屈め、両の刃を左右に広ると、煌めきは純白のオーラとなって、全身を包み込んだ。その姿は、正に大空を支配する白き大鷲の姿を彷彿とさせる。

「……実ニ、美シイ。ソレガ、貴様ノ、生命ノ輝キトイウモノカ？」

だが白夜は目を閉じたまま、答えない。

——白夜はある想いにふけていた。

これまでの戦いの中で、帝に止めを刺す事は簡単だった。けれど、それをしなかったのには、ある理由があった。

帝を殺さずに、彼を変えてしまった、力に対する執着を、何とかして断ち切ろうとしていたのだ。

だから、白夜はあえて、斬鬼丸の力を解放した帝に正面から立ち

向かうという、危険な賭けに出た。もちろん、白夜がそう思うのは、身を呈してまで自分達を救ってくれた、立花の恩に報いたいという理由もある。

——だが、それだけではなかった。

何よりも、夕紀が悲しむ顔を見たくなかったのだ。

あの娘は、他人の事を、まるで自分の事のように感じる事ができる、優しい娘だ。もし帝が死んでしまえば、嘆き悲しむ立花の姿を見て、夕紀もまた、心に深い傷を負ってしまうだろう。

それだけは、なんとしても避けたかったのだ。

——瑠璃と純白。

黄昏の中で、二つの光が、対峙する。

「サア、終ワリニシヨウカ！コノ一撃デ……、『斬鬼丸』ノ糧トナルガイイ！！」

もはや、一刻の猶予もなかった。帝の魂が完全に鬼に喰われてしまいう前に、決着をつけなければ。

「来い。お主の心の闇に巢食う、悪しき鬼の魂を！このワシが断ち切ってみせる！！」

同時に向かって動き出す、二つの光。

やがて二つの光が真正面からぶつかり合うと、眩いばかりの閃光が周囲の全てのモノを包み……一筋の光の柱が、黄昏の空にきらめいた。

「うわっ!？」

雑木林の中を進んでいた夕紀と立花は、歩く方向から突如吹き荒

れた突風と、鳴り響く轟音に、思わずよろめいた。けれど、それもほんの一瞬の事で、数秒後には、雑木林は元の静けさを取り戻していた。

「な、何？今の・・・」

「見てください、夕紀さん！」

立花が天を指差す先には、天を切り裂く光の柱がうつすらと確認できた。おそらく、先ほどの衝撃波も、二人が戦っている場所で起こったものなのだろう。

「白夜と、帝さんが戦ってる場所だ！急ごう！」

「はいっ！」

光の柱を目印に、夕紀と立花は足を速めた。

帝と白夜が戦っているであろう地点に、二人はようやく辿り着く。だが、辺りは一面、土煙が雲のように立ち込めており、夕暮れ時である事も重なり、視界は最悪で、周囲の状況はまるで判らなかった。

やがて土煙が徐々に晴れたことで、周囲の状況が明らかになる。夕紀が居た時にはなかった、巨大な窪みが地面に出来ており、それを中心に周囲の木々はすべてなぎ倒され、戦いの壮絶さを物語っていた。

「あっ！」

窪みの中央に、二人の人影を見つけた夕紀は声を上げた。

「白夜！」「お兄様！」

二人の呼びかけに、白夜と帝は反応する様子を見せず、お互いに背を向けたまま、ただじっと立ちつくしていた。夕紀と立花は、その光景に息をのんだ。

暫しの間、そうしていると、やがてそのうちの一人が、がくりと膝をついて、地面にそのまま倒れ込んだ。

「お兄様あ！」

立花は慌てて義兄の元に駆け寄り、半身を抱き起こした。崩れ落ちたのは、帝のほうだったのだ。

意識を失いながらも、その手に握られていた斬鬼丸の刀身は無残にも砕かれ、妖刀がその力を示す瑠璃色の光は、完全に失われていた。

——妖刀『斬鬼丸』の最期である。

「安心しろ、命までは取っておらぬ……………クッ!？」

「白夜……………!」

ふらりと体が傾き、倒れそうになる白夜に、夕紀は慌て駆け寄り、抱き止める。夕紀の腕の中で、白夜の体は徐々に収縮していき、やがて元の子供の姿に戻った。

「白夜……………大丈夫?」

「ああ、すまぬな。どうやら、力を使いすぎたようだ。」

そう語る白夜の全身は既にぼろぼろで、両手の長爪は一本残らず全てへし折れていた。

「よかった……………無事で、ホントに良かった……………!」

笑顔で瞳を潤ませながら、夕紀は白夜の体を、そっと抱きしめた。

第五話：帝

「ぐすっ・・・・・・・・えぐっ・・・・・・・・」

「ん・・・・・・・・？」

——深夜。

少女が泣く微かな声に、帝は目を覚ました。

ふすま少し開けて、その隙間から隣の部屋を覗くと、そこには布団の上で身をうずめてすすり泣く幼い少女の姿があった。

「うええん、お兄様あ・・・・・・・・」

「立花。また、怖い夢でも見たのですか？」

帝は、立花の傍らに腰を下ろすと、立花の顔を覗きこむ。どの位、泣いていたのだろうか。目を真っ赤にした立花はぐずりながらも、こくりと頷いた。

——立花が龍禪寺家に引き取られて、はや半年。

両親を失ったショックからか、他の誰とも打ち解けようとせず、新しい家族に大してもよそよそしい態度だった立花も、近頃はようやく活気を取り戻し、元気な姿を見せるようになったと思っていたのだが・・・・・・・・夜になると両親の事を思い出して、よくこうやって泣いていた。そんな時は決まって、帝は妹が落ち着くまで、傍に居てあげた。

「大丈夫ですよ、立花を傷付けるような悪いやつは、此処には居ませんから。」

「でも、でもっ！また『あいつ』が現れたら・・・・・・・・！」

立花の両親を死に追いやった、『人ならざるモノ』の事だ。その時の夢を見てしまったのだろう、立花はひどく怯えた様子だった。

帝は震える立花の肩に手を置き、妹を落ち着かせるように優しく語りかけた。

「もし、そんなやつが現れたら、その時は、私がやつつけてあげます。だから、安心して寝なさい。」

「う、う・・・うわああん、お兄様あ・・・・・・」

「おやおや・・・しょうがない子ですねえ。」
安心させるつもりでかけた言葉だったが、立花は余計に泣き出しまった。兄の胸にすがりつくそんな妹を、帝は赤ん坊をあやすように優しく背中を撫でた。

しばらくの間そうしていると、やがて泣き疲れたのか、立花はそのまま、すやすやと寝息を立てて眠ってしまった。帝は立花を起こさないよう、そっと布団の上に寝かせると、布団をかけてあげた。

「おにい、さまあ・・・・・・」

その安堵に満ちた寝顔を見ると、思わず帝の頬が緩む。

母親を早くに亡くし、厳格な父の元で育った帝は、人付き合いがあまり上手いほうではなかった。友人と呼べる者も少ないそんな帝にとって、養女として迎えられた立花は、いつしか唯一心を許せる相手になっていたのだ。

十五歳の帝はこの時、固く胸に誓った。

この純粹無垢な妹を、生涯自分が守っていかうと。

――けれど、その三年後。

帝と立花の境遇を大きく変える出来事が起こった。

「何故、私では駄目なのです、父上！」

帝の声が、龍禅寺の屋敷の中に響く。

帝の父、尊タケルが、龍禅寺家の後継者を決める為に、一族の者達を屋敷に集めたその席で。

――父は後継者に、立花を指名したのだ。

「お前では、無理なのだ・・・・・・いかに、剣の腕が立とうとも、それだけでは、奴等とは戦えん。」

息も絶え絶えに、座敷の中央に敷かれた布団に横たわり、尊^{タケル}は言う。その体は異形の者達との戦いで激しく傷つき、全身の至る所に施された手当ての後が痛々しい。傍らには白衣を纏った年配の医者^{ヒジリ}が常に付き添っており、容態は依然として予断を許さない状態だ。

代々、血筋によって受け継いできた龍禪寺家の者達にとって、立花が指名された事は想定外の事だった。それほどに、立花の退魔師としての素質は、若干十歳にして既に天武の才と言っているほどの域に達しており、一族の誰の追随をも許さぬほどだったのだ。

だが、帝は納得出来なかった。

「立花は、まだ十歳なのですよ！？いくら退魔師としての素質が優れていると言っても、こんな女の子に、お父様は異形の者達と戦えと仰るのですか！それに、龍禪寺家の血を引いていない者が、家督を継がせるだなんて、そんな話、聴いた事ありません！」

「……今すぐに、立花に家督を継がせようとは言わん。立花が十八になるその時まで、他の者に……家督を預けておけばよからう。」

「そんな……！では、その後はどうなるのです！」

「別に、良ろしいんじゃないやありませんの？」

横たわる尊^{タケル}を挟んで反対側に座る、ウェーブのかかった長い金髪の女が、爪にマニキュアを塗りながらそう吐き捨てた。目の前で人の親が死に掛かっていると言うのに、この女には、そんな事はまるで興味がないかのようにだった。叔父の長女・龍禪寺^{メイ} 明である。

「明姉さん……本気で言ってるのですか。」

帝の疑心暗鬼の眼差しが聖に向けられる。

「まあ、妥当だろうね。実際、その娘には僕らじゃ束になっても敵わないし。」

その横に座る、色白で細身の眼鏡面の青年——末っ子の龍禪寺^{ヒジリ} 聖が、髪をいじりながら呟く。

「あらあ？もしかして、帝ちゃんったら、自分が家を継げないのが、悔しいのかしらあん？」

そのさらに隣の、長身で短髪の体格の良い男——長男の龍禪寺スメラ皇が、身をくねらせながら、気持ちの悪いオネエ言葉で言う。

龍禪寺家の一族は代々、退魔師を生業としてきた。当主以外の人間以外でも退魔師となる事は出来るが、それを選択するかは本人の自由だ。現に、明や皇は、退魔師としての資質は優れているものの、兄妹でブランド会社を共同経営していると聞くと、まだ学生である聖も、将来退魔師になる気はさらさら無いらしい。

だが龍禪寺を継ぎ、当主となった人間には、それが許されない。『人ならざるモノと戦い、世の理脈を正す』という使命を背負って、生涯その身を異形の者達との戦いに捧げなければならないのだ。

「そんなに不服だって言うなら、帝兄さんが家督を預かったらどうだい？まあ、立花が十八になるまでだから……あと八年の間って事になるけど。それだけ当主気分を味わえれば、十分でしょ？」

聖が嘲るように言う。

「意義なし。」

「アタシはどちらでもいいわよお。」

明と皇は、もはや他人事だ。

「くっ、お前達……！」

この者達は、龍禪寺家を継ぐ事がどんなに過酷な事なのか、良く知っている。知った上で、自らが重荷を背負う事を嫌って、立花にそれを負わせようとしているのだ。帝にはその事が許せなかった。そんな兄を察したのか、すぐ傍で静聴していた立花は、兄の肩にそっと手を置いた。

「いいんです、お兄様。私、龍禪寺を継ぎます。」

「立花……！自分が何を言っているのか、判っているのですか！？」

立花は目を閉じて大きく深呼吸をした後、その決意の眼差しを帝

に向けた。

「龍禪寺家に引き取られたときから、こうなる事は覚悟していました。だから、どうか安心してください、お兄様。私が成人するまでに、修練を積んで……龍禪寺家の勤めを、立派に果たして見せます。」

「ほら、本人もそう言っているじゃありませんの。これで何も問題はないでしょう？」

「話がついたんなら、僕らは帰るよ。これでも結構忙しいんだ。」

「それじゃ、またね、帝ちゃん。立花ちゃん。それと、尊おじ様。」

龍禪寺三兄弟はそう言い残すと席を立ち、そそくさとその場を後にした。

嵐が去ったかのように静まり返る座敷に、帝と立花、横たわる尊、そして彼の看護をする、老医だけが残される。

「お父様は、本当にそれで宜しいのですか。」

こみ上げる怒りを抑えながらも、帝は父に尋ねる。

「帝よ、妹を気にかける、お前の気持ちも判らんでもない。だが、お前は戦いをするには優しすぎる。このワシも、敵に情けをかけたばかりに、この有様だ。奴等との戦いでは、その優しさが命取りになりかねん。それに……あの三人だけには、家督を継がせるわけにはいかんのだ。」

父の言い分も少しは判る。もし、あの人格の歪んだ三兄弟の誰かが選ばれれば、龍禪寺家は滅茶苦茶になってしまうだろう。けれど、かといってその代わりとして立花を後継者に立てようとするのを、帝は黙って見過ごすなど出来なかった。

「し、しかし……！」

必死に父に食い下がる帝に、立花は制すように言う。

「お兄様。私の事なら、本当に大丈夫ですから。」

そ立花は無理に笑顔を作って、帝に微笑んで見せた。

帝にはそんな妹の顔が、どこか悲しげに見えて――

「くっ……！！」

「！ お兄様！」

いたたまれなくなった帝は、妹の制止も聞かず、無言でその場を後にした。

帝は、屋敷の周囲を取り巻く竹林の中にある、古い小さな社がある広場に足を運んでいた。立花と、よく遊んであげた場所だ。帝は社の前の石段に腰を下ろし、深くため息をつく。

澄み渡った秋の空を見上げて、流れる雲をただぼんやりと眺めていた。

——帝は自分を責めていた。

帝にとって、家を継ぐ事などどうでも良かった。しかし、立花がこのまま後継者になってしまえば、彼女はかの異形の者達と戦う使命を、一生その身に背負って生きていく事になる。もし、そうなってしまったら、立花を守ってやれる自信が、帝には無かった。

立花だって、両親を奪った彼らと戦う事が怖くない筈がない。出来る事ならば、妹にそんな復讐まがいな事はさせたくなかったし、むしろ自身がその役目を背負って生きて行く覚悟があった。

——けれど、それは許されなかった。

帝にはそのような退魔師としての能力は何一つなかったのだ。

勿論、努力はした。退魔術を得るため、肉体、精神共に極限まで鍛え上げ、ありとあらゆる修練を試みた。そのため帝は一族最強と謳われるほどの剣の腕を身に付けることは出来たが、退魔術を習得するに至る事は無かった。

「くそっ！」

帝は地面に拳を打ち付ける。何よりも、自分の無力さが許せなかった。

「私に、力があれば……」

そうだ。力さえあれば。

立花を守ってやれる。妹に重い使命を背負わせる必要もないのだ。

「もし、そんなやつが現れたら、その時は、私がやつつけてあげます。」

あの夜、立花に対して、軽々しくそう口にした言葉が悔やまれた。
——立花に、嘘をついてしまった。そんな力なんて、本当は何処にも無かったのだ。

どうしようもない無力感に打ちひしがれて、帝はただ深くうなだれた。

『——ガ……ガ……欲……カ……——?』

「! 誰だ!?!」

突然聞こえた謎の声に、帝は我に返って周囲を見渡すが、声の主らしき人物は何処にも見当たらない。

『——力ガ……欲シイ……カ……——?』

再び声が聞こえ、帝は背後を振り向いた。声は社の中から聞こえてくるような気がしたのだ。

龍禅寺の所有であるこの社は、普段は人が入れないよう、厳重に封鎖されているはずだが、この日は何故か鍵が外されていて、帝が戸を引くと簡単に開いた。内部に入る事は父・尊タケルに固く禁じられていて、帝はさすがに入るのを躊躇ったが、謎の声の事も気になるし、父もあんな状態だ。それに鍵を外した無法者が中が居るかもしれないという事を考えると、そんな事を気にしている場合ではなかった。

意を決し、帝が扉を開くと——

「むっ………！」

内部へと足を踏み入れた瞬間、その場に漂う異様な気配を感じた帝は、咄嗟に身構えた。

警戒しながら、周囲を目をやる。ひどく寂れた社の内部には、ただ一振りの、鞘に収められた刀が神棚に奉られている以外、他には何も見当たらない。しかしそう広くない社の内部には、『それ』を中心に、何故か微かな風が渦巻いており、そのせいだろうか、外よりも随分肌寒く感じた。

帝がおそろおそろ近付くと、『それ』は吸い込まれるような淡い瑠璃色の光を放ち始めた。

その常軌を逸したな光景を目の当たりにし、流石に驚いた帝だったが、それに一つだけ心当たりがあった。

「まさか、これが『斬鬼丸』………？こんな場所にあったのか………」

龍禅寺家に代々伝わる、龍禅法師が使ったとされる妖刀。それが、こんな所に奉られていたとは、帝にも知らされてはいなかった。

『……力を求めるならば、我を手にするが良い……』

今度ははっきりと聞き取る事が出来た。間違いない、声の主は、この『斬鬼丸』そのものなのであろう。だが、『斬鬼丸』が放つ異様な気配は、間違いなく『人ならざるモノ』のそれであった。

帝は躊躇いつつも、『斬鬼丸』に声をかける。

「お前は、何者だ？『人ならざるモノ』ではないのか？」

『……我が何者か、そんな事は、どうでも良い事。汝の力を欲する心が、我を悠久の眠りから呼び醒ました。我を手を取れ。さすれば、汝は力を得るであろう……』

「正体すら明かさぬモノの言葉を、信じろと？」

『……信じるほかに、汝に道は無いはずだ。愛する者を、守りたいならばな……』

「！………何故それを………」

『——我には判る。汝が何の為に力を欲すのか。迷いを棄て、我を手取るのだ。お前の求める力が、此処には在る——』

帝は静かに目を閉じる。

——そうだ。何を迷う事がある？この声の正体が相手は何者であろうが、この際どうでもいい。たとえそれが龍禪寺家にとって忌むべき相手であつたとしても、それが何だ。彼らを討ち倒すという使命が、何だと言うのだ。そんな役にも立たない誇りや、無駄に歳月を重ねただけの古臭いの伝統をいくら重んじたところで、それが大切なモノを守ってくれたことが、今までにあつただろうか？

否。

その龍禪寺の誇りや伝統が今、妹を……立花を縛り付け、修羅の道に駆り立てようとしているではないか。

正直、ワラにもすがりたい気持ちだったが、仮にこれが罫で、最悪自分が死んでしまったとしても、立花を守る術もないまま、ただのうのと生きるよりは、遥かにマシだとさえ思えた。目の前の微かな希望に賭けてみたかったのだ。

もし、『斬鬼丸』を勝手に持ち出した事が知れて、一族を追放されても文句は言えないだろう。だが、そんな事は今の帝にとっては些細な事だ。

今、必要なのは『力』だ。

かけがえの無い人を守る為の。

帝の目がゆっくりと開く。

「本当に、力を……手に入れることが出来るのか？」

『——それは保障しよう。ただし、汝が我を使いこなせばの話だが——』

「それが出来なければ、所詮私はその程度だったという事です。その時は私の魂を食うなり、好きにするが良い。」

その意を決したその表情に曇りは無かった。

そして、帝の手が『斬鬼丸』に触れた時。

「おおおお・・・！！」

全身に電流が駆け巡るような感覚に帝を襲った。

視界が真っ白に染まってゆく中、『斬鬼丸』の確かな声が、帝の脳髓に直接突き刺さるように語りかけてきた。

『——よくぞ、我を手にした。リュウキツサイ“龍枯斎”の血を引く者よ。もし、汝がさらなる力を欲するならば、異形の者達と戦い、その魂を我が糧として与えるのだ——』

「ここは・・・」

気が付くと帝は、良く見慣れた部屋の天井を見上げていた。

龍禅寺家の屋敷の、自分の部屋である。帝は畳の上に敷かれた布団の上で寝かされていた。

どれ位、眠っていたのだろうか。照明は消されていて、窓から差し込む月の光だけが、座敷の中を照らしていた。

「うぐっ！」

帝はゆっくりとその身を起こすが、軋むような痛みが全身を貫き、思わず布団に身をうずめた。その時帝は初めて、自分の体の至る所に包帯が巻かれている事に気が付いた。

現状が全く理解出来ず、帝は記憶を辿ろうと試みる。

「私は・・・はっ！」

——そうだ、自分は神社の近くの林の中で、あの白き麗獣・
・・白夜と戦っていたはずだ。

それで、どうなった・・・・・？

記憶にもやがかかっている、どうしてもそれ以上のことは思い出せない。

だが、一つだけ。

帝の脳裏に鮮明に刻み付けられた、ある光景が浮かび上がった。

——それは『斬鬼丸』が砕け散った、最期の瞬間。
敗北の瞬間であった。

「・・・・・『斬鬼丸』が、負けた・・・・・。」
確かめるように、帝は自らそう口にした。

——けれど、何故だろう。そこには、こみ上げて来るはずの屈辱感や失望感といった感情はなく、その心は清々しさすら感じられる開放的な気分で、自分でも驚くほど平静で居られた。

ふと、部屋の窓の縁に腰掛ける人影に気付く。巫女装束に身を纏っている少女を見て、一瞬立花かと思ったが、彼女より背が随分低く、髪の色も目の覚めるような白だ。

「気が付いたか？」

そこには、巫女装束を纏った白夜の姿があった。

第六話：風？（前書き）

編集間違えです。

すみませんでした！！友人！

第六話：風？

「無理に起きようとするな。あのような、肉体を無理に変化させるような無茶をしたのだ。当分は動けまい。」

巫女服に身を包んだ白夜は、布団の中で半身を起こす帝にそう言った。

「白夜君。その姿は……………」

どうして白夜が自分の部屋に居て、どうしてそんな事を言うのか、判らない事が多すぎて、聴きたい事は山ほどあったが、思わず帝は最初に目に付いた疑問を口にしていた。

「ああ、これか。立花殿に借りたものだ。この姿に合う服が、これしか無かったものでな。」

その場でくると一回転してみせる白夜。結構気に入っているのだろうか、その表情は心なしか嬉しそうだ。闇の中で月光を浴びた白夜の姿は、とても幻想的で……………素直に綺麗だと思った。

だが、帝は何かを思い出したかのように、再び白夜に問う。

「立花……………そうです、立花は……………?!」

「夕紀が今病院に連れて行っておる。幸い、怪我のほうは大したことは無かったそうだ。」

「そうですか……………」

——白夜の姿を見た後でも、相変わらず帝の記憶は曖昧だったが、この現状を見れば、大体の予想はついた。

「私は、君に敗れたのですね。」

白夜は何も答えなかったが、その沈黙が全てを物語っている気がした。

「私の……………完全な敗北です。【斬鬼丸】を失った私に、もはや何の価値もありません……………殺しなさい。」

「それはできぬ。」

白夜は即答する。

「何故です？ 私は君を殺そうとした男ですよ？」

「お主は、【斬鬼丸】に宿る異形のモノに、心を操られておったのだ。それがお主を戦いに駆り立てた。だが、その【斬鬼丸】亡き今、ワシがお主を殺す理由はもはや何処にも無い。」

「・・・・・・仮にそうだったとしても、それを知りながら力に対する執着を棄てず、この私が立花を傷を負わせてしまったという事実、変わりはありません。」

「ならば聞くが、お主が【斬鬼丸】を手にした理由は、自身の無力さのせいで、立花が龍禪寺家を継ぎ・・・・・・当主としての宿命を背負わせてしまう事を、避けたかったのではないか？」

「何を根拠に、そのような事を言うのです。」

帝の表情が、僅かに曇った。

「――立花殿に、以前のお主の話を聴いた。お主がかつて、立花殿が言うような優しい男だったならば、ただ単に家督を欲するが為だけに、妖刀の力にすがったとは、どうしても思えぬ。後継争いに敗れてもお主が【斬鬼丸】の完全な力を追求したのは、妹を守るため、己が戦う力を手に入れる為だったのではないか？」

「貴様などに・・・・・・」

白夜のその言葉に、帝は苦悩に顔を歪ませながら叫んだ。

「貴様などに何が判る！？ 龍禪寺家の長男に生まれながら、異形の者達と戦う術を、何ひとつ受け継がず・・・・・・符術すら使うことができなかった、この私の苦悩が！ 一族の血筋を引いている訳でもない、まだ幼い義理の妹が！ 龍禪寺家の宿命を背負わされると知ったとき、どれだけ不甲斐ない想いだったか、貴様に判るか！！」

叫んだ後、再び力なくうな垂れる帝。その姿は、どうしようもない悲壮感が滲み出ていた。

「ええ・・・・君の言うとおりです。妹が正式に後継者となる、残り三年間で、どうしても【斬鬼丸】を完全な形にしなければならなかった！なのに、なのに全てが台無しです。斬鬼丸を失った今、もう、私には何も残されてはいない。全て・・・・・・そう、全て、終わ

りです。フ．．．ハハハ．．．！無様なものですねえ．．．
．．．非道な罠にかけてまで君の命を狙い、守る為に手に入れた力で、
守るべき者を傷つけ．．．．．！そして自らもこの様ですか。ハ
ハハ、笑えますねえ！大笑いですよ！ア、アハハハハ．．．．．
！」

「愚か者！！」

白夜に怒鳴られ、帝の肩がびくりと肩が跳ねた。

「．．．．．何故あの娘が！自らの身を省みずにお主を止めよう
としたのか、判らぬのか！」

強い口調で叱責され、思わずたじろぐ帝だったが、次の瞬間、白
夜の表情は急に穏やかになり、帝を諭すようにこう続けた。

「はるか昔．．．．．戦が起こり、住む村も、家族も、すべてを
失った一人の男がおった。その者は自らの無力を呪い、永き時を経
て．．．．．やがて、人であることを棄てた。だがお主には、ま
だ守るべき者が居るではないか。」

「戦う力を失った私に、何が出来ると言うのです？」

帝はうらめしそうな目で、白夜を見る。

「戦う事ばかりが、大切なモノを守る事だとは限らぬ。それに、お
主が死んだら、残された立花はどうなる？あの娘が初めてワシと対
面したとき、ワシと戦おうとするのをお主が止めたのは、妹の為を
思っている事ではないのか？」

「それは．．．．．」

白夜は帝に、「ふふっ」と微笑んで見せる。

「あの娘は、今でもお主の事を気遣い．．．そして慕っておる。そ
れが判らぬほど、お主も愚かではあるまい？」

白夜がそう言うと、突然座敷のふすまが開いた――

「お兄様！」

「！立花？！」

開かれたふすまの先には、立花と夕紀の姿があった。

呆然とする帝に、立花は瞳を潤ませてすがりつく。

「お兄様、私はずっと、お兄様の事を誤解していました。お兄様が【斬鬼丸】に心を奪われてしまったのは、私が後継者に選ばれたことで、お兄様の自尊心が傷付いてしまったからだと……でも、全ては私の身を案じての事だったのですね……」

「立花……？病院に行ったのでは……」

「ハハハ、あれは嘘じゃ。立花が居ては、おぬしの本心が聞けぬと思つての。」

「病院には、ちゃんと連れて行ったケドね！」

白夜の横で、夕紀が親指を立ててウインクする。

「もう目覚めなったらどうしようと思つて……心配しました。よかったです、本当によかった……」

「立花、私は君を傷付けてしまった。もう君に兄と呼ばれる資格は……?!」

言おうとする帝の唇に、立花は人差し指をそつと押し当てた。

「もういいんです。私には、お兄様が居てくれれば、それでいいんです——」

そう言つて、立花は兄に微笑む。

「立花……」

それはずっと小さい頃に死に別れた、優しかった母の面影を彷彿とさせるような笑顔で——帝はその優しい笑みに暫しの間、見とれてしまった。

「ひゅーひゅー、ラブラブう。」

その様子を見た、夕紀が悪戯っ子のような顔で水を差すと、二人は赤面して慌てて離れた。

「ゆ、夕紀さんっ！茶化さないでくださいよう！」

真っ赤になりながら、立花は照れ隠しに反論してみるが、どう見ても後手後手に回っていた。

「あはは、ごめんごめん。でも、これならもう、二人は大丈夫だよ

ね？」

「ああ、そうだな。」

夕紀と白夜は互いに顔を見合わせてうんうんと首を縦に振った。

「白夜さん、夕紀さん……」

「それに帝よ。立花殿はお主が思っている以上に、強い娘だ。このワシが保障する。たとえ立花殿が龍禪寺の使命を背負って戦ったとしても、そうそう挫けたりはせぬ。」

「いやあ、あれは凄かったもんねえ。」

「うむ、立花と戦わずに済んで良かったと、つくづく思うわい。」

二人のやりとりに、帝は「はて？」と首を傾げて尋ねた。

「何の話をしているのです？」

——そう。それは、さかのぼること数時間前。

『ウオオオオオオオッ！！』

白夜たちが意識を失った帝を、龍善神社に運ぼうとしていたとき、力を失い、地面の上で沈黙を続けていた【斬鬼丸】が、突如けたたましい咆哮を上げた。

折れた【斬鬼丸】から爆発的に噴出した蒼炎は、空中に身長3mほどの巨大な人型の異形の姿を投影した。

『——あと少しであったものを……』

異形の眼差しがぎろりとこちらを向く。ただならぬ殺気に、三人は思わずたじろいだ。

『許さぬ……あと少しで、この男の魂を、喰らう事が出来たものを。長年に渡り“龍枯齋”^{リュウキツサイ}によって施された封印から解き放たれ、この男の肉体を我が物とすることが出来たものを！』

「リュウキツサイ?? な、何言ってるの、あいつ?!」

慌てふためく夕紀が、二人に尋ねる。

「龍枯齋は、龍禪法師が龍善神社を建立する以前に名乗っていた名

前です。おそらくあれは、彼によって【斬鬼丸】に封印されていた鬼の魂そのものなのでしょう。」

『小娘。それは違うな。我はお前達人間が、かつて“風神”と畏れた存在。名を持たぬ我に、龍枯斎は“迦羅”^{カラ}という名を付けた。』
その名を聞いた立花の表情が強張る。

「迦羅」……！龍禅法師と共に、鬼を退治という風神と同じ名前です！」

「風神って……！あいつ、神様なの！？」

「いや、単にそう呼ばれていただけの事であろう。どうやらあやつは、龍枯斎に使役されていた【人ならざるモノ】のようだな。」

そういえば以前、白夜が言っていた事を夕紀は思い出した。【人ならざるモノ】に名を与える——それはすなわち、『使役する』という意味だ。

『だが！事もあるうにあの男は、不意を突いて我を斬りかかり、我の魂を自らの刀に封印した！あれだけ鬼どもを倒すのに協力してやったというのに！自らの理脈が乱れたという理由で！！』

それは立花も知らない事だった。龍禅寺家に伝わる伝承によれば、龍禅法師と共に鬼と戦った風神は、その戦いで傷つき、倒れてしまったと語られてきたからだ。

だが、迦羅の語る真実は、伝承よりも遥かに残酷な事実を語っていた。

『それだけではない！己の力だけでは鬼を倒す事もままならぬあやつは、刀に封印した我の力を散々利用した挙句、全てが終わった後、あの狭苦しい社の中に、永きに渡って閉じ込めた！だから我は誓った……いつの日か、新たな肉体を手に入れ、この世から龍枯斎の血を一滴残らず根絶やしにしてやろうと！！』

絶句する三人を前に、迦羅が立花に抱かれて気を失っている帝を見下して、下品な笑みを浮かべた。

『グフフ……しかし、つくづくその男も愚かな者だ……
……よもや、この俺に利用されているとも知らず、この俺が、再び

復活するための、糧を与え続けてくれたのだからな。』

「！まさか、お兄様が変わってしまったのは、あなたがお兄様の心を惑わして……！」

『勘違いするな、小娘。我はこの男の潜在意識に語りかけただけにすぎぬ。この男の力に対する執着は間違いなく、この男自身のもの。グフフ、見物であったぞ。この男が妹を守る為などと称しながら、【人ならざるモノ】を、次々と手にかける様はな……！』

「あなたは……！」

立花の顔が、みるみるうちに怒りに染まっていく。よほど悔しいのだろう、握り締めた拳は震え、瞳には涙が潤んでいた。

『……ともあれ、その男が五年の間、役に立ってくれた事は事実。どれ、礼として、まず手始めに今度こそ、その男の魂を頂戴するでしょう。』

風神・迦羅が地面に降り立ち、ゆっくりとした足取りでこちらに近付いて来る。迦羅が一步地面を踏みしめる度に、どすん、と体の芯まで響くような地響きが鳴り響いた。

——絶体絶命だった。白夜は帝との戦いで力を使い果たしてしまい、戦える状態ではないし、立花も怪我を負っている。だが、迦羅の前に自ら立ち塞がったのは、その立花だった。

「夕紀さん、白夜さん。下がっててください。」

「ええっ、でも!？」

「お主、死ぬ気か!？」

立花の表情が全くの別人に変わっていた。初めて出会ったときに見せた、狩人の顔だ。

「大丈夫です。私は、負けません。」

その両目でしっかりと前だけ見据え、迦羅を睨みつける。

『どけ、龍枯斎の血を引かぬ小娘よ。』

だが立花は少しも怯まず、眼前の迦羅を指差す。

「私はあなたを許しません……どのような理由があったに

せよ、あなたは兄の心を惑わし、そして利用した。その報いを今此処で、受けて貰います。さあ、来なさい！龍禅寺の次期当主、龍禅寺 立花が相手です！」

『死に急ぐか……よかろう、兄と共に、冥府へと送ってくれる！』

迦羅の豪腕が、ぶおん、と豪快な風切り音を立てて、立花の脳天目掛けて振り下ろされる。

「立花さん！！」

立花は素早く護符を一枚取り出すと、頭上に傘のように即席の退魔結界を展開し、それを防ぐ。

『ぬおおう！？』

その堅牢な結界に自慢の豪腕を弾かれた迦羅は思わずたじろぐ。それを見逃さず、立花が両手を袖の中に突っ込み、ありったけの護符の束を取り出すと、それを全て上空にばら撒く。無造作に放り投げられた幾つもの護符の束は空中で弾けると、円弧を描きながら舞い上がり、やがて立花の右隣の一箇所に集まってゆく。

「符術、顕現符！着たりませ、符王招来！！」

立花がぱんつと顔の前で手の平を合わせると、一枚の朱い護符を核として、その外周に他の白い護符が連なり合って、外皮を形成してゆく。やがてそれは迦羅と同じほどの、がっしりした体格の、武人の姿となった。その容姿は、テレビなんかで見た仁王や、不動明王なんかに似ていた。

『ふん、木偶の坊が！』

迦羅の拳が、護符で出来た巨人——符王に殴りかかる。だが、その拳が巨人に届く前に、符王の拳が、迦羅の顔面に突き刺さっていた。

『な……ニ……？』

符王のカウンターパンチを食らった迦羅の体は、その予想以上の威力に大きく揺らいだ。だが、迦羅も負けまいと地面を踏みしめてなんとか持ちこたえ、反撃を開始する。符王の脇腹に渾身の一撃を

叩き込むが、その拳は見えざる力によって弾かれ、符王に届く事は無かった。

「無駄です。符王の全身は退魔結界で構成されています。あなたの攻撃は届きません。」

『おのれっ!!』

ならばと迦羅は立花に狙いを定めて突進する。

「符王っ！」

立花の声を合図に、符王が目にも留まらぬ速さで迦羅の目の前に回り込むと、再び符王の右ストレートが迦羅の顔面に直撃した。それを皮切りとして、符王の嵐のような怒涛の連続攻撃が迦羅に叩き込まれてゆく。

ドドドドドッ！ ガガガガッ！

成す術も無くただ殴られるだけのサンドバック状態と化した迦羅に、符王の鉄拳が命中する度に、迦羅の体を形成する蒼炎が周囲に飛び散ってゆく。やがて符王の攻撃が終わる頃には、迦羅の体は、ぼろぼろになってしまった頭部だけを残して、他は全て消失してしまっていた。残された灯火も弱々しく、もはや戦う力など残されてはいないだろう。

『馬鹿な……!!』

符王が空中を力なく漂う迦羅の頭部を、がしりと鷲づかみにする。

『そ、その力……もしや……お前は……神楽の……!!?』

「……………符王。」

立花は少しの躊躇する様子すら見せず、符王に命令を下す。迦羅の頭部が、符王の手によって握り潰され、最期の灯火が花火の様に弾け跳んだ。

すると、符王の体を構成する護符が一斉に剥がれ落ち、風に吹かれて空へと舞い上がる。符王の核となっていた一枚の紅い護符・

・・・『顕現符』だけは、空中を泳いで主の手の中に戻った。

「悪鬼、退散。」

舞い散る護符の中で、立花は目を閉じてただ一言だけ、そう呟いた。

——結局。立花は戦闘が始まってから、一步もその場を動くことなく迦羅を倒してしまった。

「す、すごい・・・・・・・・・・」

「末恐ろしい娘だ・・・・・・・・・・」

圧倒的な戦いぶりを見せる立花に、出る幕のない白夜と夕紀は、ただ口をぽかんと開けて立ち尽くしていた。

——事の一部始終を聞き終えた帝は、呆然として暫くの間、硬直していた。

【斬鬼丸】に憑依していた『鬼』の正体が、かの風神“迦羅”であったという事も驚きだったが、帝の関心を引いたのは別の事だった。

「倒した・・・・・・・・・・？」【斬鬼丸】に封印されていた風神を、立花が？」

帝はそう呟くと、突然大声で笑い出した。それは以前のような、狂気を帯びた高笑いでも、自身の無力を嘲っている時のものとも違う。立花の成長が嬉しいのか、はては自分が育て上げた【斬鬼丸】が、いともあっさり倒されてしまった事が、滑稽に思えたからなのかは判らない。ただ、面白可笑しくて、帝は数年ぶりに、心の底から笑った。

「お、お兄様?!」

「気でも違ったか、お主?!」

「あははは・・・すみません。いやはや、この私が、五年もかけて、手塩にかけて育て上げた【斬鬼丸】・・・その力の源であった迦羅を、ま、まさか立花が、一瞬で倒してしまうなんてねえ、フッフ・・・」

その後暫く、帝の笑い声が龍禅寺の屋敷の中に響いた。

最終話：理脈

——数分後。

笑いがようやく収まった帝は、布団の上に正座して二人に向かって深々と一礼した。

「白夜君、夕紀さん。君達には、本当にすまないことをしました。謝って済まされるとは思ってはいませんが……どうか謝罪させてください。」

それを見て、立花も頭を下げる。

「それと、ありがとうございます。お陰で、元のお兄様を取り戻す事が出来ました。」

「うむ、帝……いや、帝殿。これからも妹を大切に。」

「ええ、判っています。失ってしまった立花との五年間を、これから取り戻していくつもりです。」

「お兄様……」

長年のわだかまりが解けた兄妹が、互いに目を見合わせると、二人揃って頬が朱に染まった。

「さて、ラブラブなお二人の邪魔する訳にはいかないし、帰ろっか？ 白夜。」

「うむ、そうするか。」

「あつ、ま、待ってください！」

二人が部屋から立ち去ろうと立ち上がると、立花がそれを制止した。

「あ、あの、もう遅い時間ですし……今夜はうちに泊まって行かれませんか？」

確かに、時計は夜十時を過ぎていた。だがその提案に白夜は、首を横に振って応えた。

「悪いが、遠慮しておく。」

「えー、何で？」

夕紀が不満そうな顔をした。

「これ以上ワシがお主らと居ると、お主らの『理脈』を乱してしまうかもしれないのだろうか？」

「あ………」

白夜の言葉に、夕紀はハツとした。そうだ、『人ならざるモノ』である白夜の周囲にいる人間は、『理脈』が乱されて、厄を呼び寄せてしまうのだ。帝と立花……特に帝は、今日一日かなりの時間、白夜の近くに居たはずだ。それが帝と立花の理脈にどう影響してしまうのか、白夜は心配したのだろう。

だが当の立花はにっこり微笑みながら言う。

「ふふっ、その心配はありませんよ。『人ならざるモノ』と、接触する事の多い私たち退魔師は、禊によって、自らの『理脈』を保護しているのです。」

「そっかあ、よかったあ。」

夕紀はそれを聞いて心底安心したように、ほっと胸を撫で下ろす。「それならば、乱れてしまった理脈を元に戻すことも可能なのか？」

「それは………」

表情を濁す立花の代わりに、帝が答える。

「一度乱れてしまった理脈は、自然に再生するのを待つほかありません。」

「それはどれ位、時間がかかるものなんですか？」

夕紀がそう尋ねると、帝は難しそうな顔をした。

「数ヶ月か、はては数年か……再生する期間は人によって様々なので、何ともいえません。」

その答えに、白夜は残念そうに、

「そうか……どのみち、ワシが傍にいては、夕紀の理脈が再生する事は無いのだろうか？ ならばワシは夕紀の元を離れるしか………」

「やだ！ そんなのイヤ！！」

夕紀はあからさまに白夜に抱きつく。

「のわっ！駄々をこねるな、馬鹿者！」

「私は白夜と一緒にいゝるゝのおゝゝ！！」

そのまま夕紀は、白夜に自分の頬をこれでもかと言わんばかり摺り寄せた。

「離れていても、お主が見えないところから見守っていてやる。お主もそのほうが安心であろう？」

「いゝやゝだゝゝ！！！」

その姿は正に駄々をこねる子供そのものだ。

「あの、その事なのですが。」

そう言うと立花は懷から御守りを取り出して、白夜に差し出した。「これは？」

「この御守りの中には、強力な退魔結界の護符が入っていて、これを白夜さんが身に付けることで、周囲の人間の理脈が乱されるのを、防ぐ効果があるのです。」

「それがあれば、白夜と一緒にいられるんだね！」

夕紀の顔が一転して、希望に輝いた。

「ですが、良い事ばかりではありません．．．．．これを白夜さんが身に着けている間は、あの結界部屋の中のように『人ならざるモノ』としての能力に、制限がかけられてしまうのです。」

「なるほど、姿を変えることが出来なくなる、という訳か。」

立花はこくりと頷く。

「そういう事です。もし、白夜さんが夕紀さんの傍に居る道を選ぶのなら、白夜さんはこれを持つことをお勧めしますが．．．．．」

白夜は「うゝむ」と、少し考え込んだが、やがて受け取った御守りを立花に差し出して、

「悪いが、受け取れぬ。力が失われてしまつては、この先夕紀を守つてやれる自信が無い。」

「そんなあ．．．．．」

夕紀は残念そうに、がっくりと肩を落とす。一同は沈黙して、暗いムードが漂った。

そんな中、帝は考え込むように俯いた後、やがて何かを決心したように面を上げた。

「立花、『あれ』を此処に持ってきてくれませんか？」

「!・・・お兄様、でも、それは・・・・・・・・」

「構いません。早く。」

帝に言われ、立花は屋敷の奥に姿を消す。

暫くして戻ってきたその手には、一振りの脇差が握られていた。

「むっ！」

その脇差が放つ妖気に、白夜は思わず身構える。

「それは、妖刀か・・・・・・・・！」

「ええ、龍禅寺家に伝わる、もう一振りの妖刀・・・・・・・・【小鬼^{コオニ}丸^{マル}】。まあ、【斬鬼丸】ほどの妖刀ではありませんが、九十九神^{ツクモガミ}である、その妖刀ならば、結界の影響を受けることなく力を発揮する事が出来るはずです。」

「なるほど、な。【斬鬼丸】があゝの結界部屋の中でも妖力を発揮できたのは、そのためか。」

「でも、その【小鬼丸】を使って、白夜の魂が喰われちゃう、なんて事はないの？」

「【小鬼丸】は気分屋ですが、強いものには従います。白夜君なら、十分【彼】を使いこなす事ができるはずです。」

「だが、良いのか？これは龍禅寺家の家宝なのであろう？」

白夜が尋ねると、帝は何やら不思議な笑みを浮かべて言った。

「ええ、どのみち【彼】は私には扱えませんか。」

「ふむ・・・・・・・・では有難く頂いておく。それと立花の御守りもな。」

帝の妙な言い分も気になったが、白夜は二人の行為に甘える事にした。

「それじゃあ、またね。立花さん、帝さん。たまに神社に遊びに行くから。」

屋敷の角先で、夕紀は立花達に小さく手を振る。

「はい、夕紀さん。白夜さんもお気をつけて。困った事があったら、私達に何でも言うてください。出来る限り力になりますから。」

「ねね、立花さん。」

「はい？」

夕紀は手招きして、立花を呼び寄せて、

「（式には呼んでね。）」

と、立花だけに聞こえるように耳元でそう囁くと、立花の顔からポツと湯気が出て、耳たぶまで真っ赤になった。

「わ、私達は兄妹なんですよ！そんな事あるわけ……！！」

「でも血は繋がってないんでしょ？なら問題ないじゃん！」

「そ、そういう問題では……！！」

「何を話しているのだお主らは……」

二人が何の話をしているのか判らない帝と白夜は、ただ首を傾げるばかりだった。

「あの、白夜君。最期にひとつだけ、聞いていいですか？
今度は帝が、門を出ようとする白夜を呼び止めて尋ねた。

「――君が話してくれた、人を棄てた彼は……今、愛する少女と一緒に、幸せに暮らしているのでしょいか？」

白夜は少し照れた様子で、再び帝たちに背を向けて、

「さあ、どうかの。」

と、一言だけ言い残すと、逃げるように先に門を出た夕紀の後を追いかけた。その様子を見た帝は、ひとり含み笑いを浮かべていた。
「お兄様？どうしたのですか？」

「フフ……いえ、何でもありませんよ。何でも。」

帝はそう言うと、夜空を見上げた。

——この五年間、帝は【斬鬼丸】を育て上げる事だけに心血を注いだ。

けれど、その【斬鬼丸】はもう存在せず、帝が異形の者達と戦う術も、もう無い。

龍禅寺が彼らと戦うには、もはや立花の手を借りるほか無いが、いくら立花が退魔士としての能力が優れていても、戦いの日々は熾烈を極めるだろう。

——だから、帝は再び誓った。

帝が家督を返上し、立花が当主となるまで、残り三年。

その間に修練を積み、きつと……いや、必ず立花の背中を守る程の退魔術を身に着けてみせる、と——

それが帝の、新たな目標だ。

「さて……明日からまた、忙しくなりそうですね。」

漆黒の空に輝く満月を見上げながら、帝はそう呟いた。

「随分、遅くなっちゃったね。私もうお腹ペコペコだよお。」

ふらつきながら帰宅の途につく夕紀と、その後を歩く白夜。龍禅寺の屋敷は神社のすぐ隣にあって、夕紀達の家からもそう離れていない事が唯一の救いだった。

「でも……今思えば、あの【迦羅】っていう風神も、少し可哀相だったよね。仲間だった龍桔斎に裏切られて、長い間封印されちゃってたんだもんね……勿論、【迦羅】がやったことは許せないけど、ちよつと同情しちゃうな。」

「所詮、『人』と『人ならざるモノ』は相容れぬ存在、か……」

「白夜？」

夕紀は足を止め、振り返る。白夜は何やら思いつめた様子だった。

「のう、夕紀。」

「何？どうしたの？」

「ワシは本当に、お主の元に居ていいのだろうか？」

その言葉にしばしきよんとしていた夕紀だったが、その後軽く溜め息をつくど、少しあきれた様子で腰に手を当て、俯く白夜の顔を覗きこんだ。

「もお、なんでそんな事言うかなあ？」

「ワシのせいで、お主の理脈が乱れてしまったのだぞ？」

白夜が罪悪感に満ちた瞳で、訴えるように言う。

「理脈がどうか、そんなのどうだっていいよ！そりゃあ、これから何が起るのか、少しは不安だけど……それでも私は、白夜と一緒に居たい。これは私の勝手な我侭だよ。白夜はその我侭に付き合ってくれてるだけ。そうでしょ？」

白夜はきよんとした顔を目の前の少女に向けた。

「それにさ、生きるって事は、きっと誰かに迷惑をかけるって事だと思うんだ……って、なんか説教臭くなってきちゃったね。あはは、ごめん。」

夕紀はてへっと舌を出して笑った。

その笑顔を見た瞬間、胸にこみ上げる何かを感じて、目頭が熱くなった白夜は、思わず夕紀から顔を背けた。

「ワシだって……」

「ん？」

「わ、ワシだって、その……ず、ずっと夕紀と一緒に居たいと思っておる……」

白夜はそう言うと、顔を真っ赤にして潤ませた目を夕紀の顔から逸らした。

——白夜のその言葉と仕草は、夕紀の全身に稲妻のような衝動を駆け巡らせ……彼女の理性は、このとき跡形も無く崩壊した。

「白夜あ~~~~~!!」

「のわあっ!?!」

気が付くと夕紀は巫女服姿の白夜を強く抱きしめて、頬を摺り寄せていた。

「今のはプロポーズと受け取って良いんだよね……? わかったよ白夜、今すぐ白夜を私のお嫁さんにしてあげる!」

白夜は抱きしめられながらも夕紀から背を向けて抜け出そうともがくが、立花の御守りによって人並みの力しか発揮できなくなってしまった少女の筋力では、夕紀の拘束から抜け出すことなど、どう足掻いても無理だ。

「お、お主! 人が力を使えないことを良いことに……ええい離せ!」

「だあってえ、巫女服の白夜、カワイイんだもん。ねえ、白夜あ……私達も愛を育もう!」

夕紀がここぞとばかりに、白夜の着物の袈裟の内側に手を忍ばせてくる。

「や、やめんか! 此処は外だぞ!」

「へえ、じゃあ、家の中ならいいんだ?」

同時に、今度は白夜の帯紐を手を伸ばし、袴を脱がそうとしてくる。

「やめろと言っておろうに! それにお主、何故そんなに着物を脱がすのに手馴れておる!」

「ええと、立花さんから結界部屋の鍵を奪ったとき、立花さんの巫女服、脱がしちゃったからかな?」

「……はあ!?!」

白夜は驚愕した。

「お主は立花殿にも手を出しておったのか!!??」

「あ、でも安心して?今の私は白夜一筋だから……はああ、
白夜ぁ……!」

夕紀の目は完全に血走っており、鼻息も相当荒い。こうなってしまつては、もう彼女の暴走を止める事は不可能だという事は、これまでの経験から良く知っている。それが余計に白夜を精神的に追い詰めた。

「やめろ!やめっ……アッ、ア————ッ!!」

——それは夏の暑さが残る、ある日の出来事。

白夜の断末魔の叫び声は、月夜の空の彼方へと虚しく消えていくのだった。

ミニチュア☆がくでん番外編

妖刀・斬鬼丸編

【完】

最終話：理脈（後書き）

すいません。

完結しますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0965o/>

番外版 ミニチュア☆が～でん ～妖刀 斬鬼丸編～

2010年12月28日22時25分発行